

諸作毛之取收其節々に爲<sub>レ</sub>究よし、大麥小麥秋季に蒔、春調製後るれば柄麥にて置くが、七月になれば小蝶に化して飛舞、農語に之をほけと謂也、亦天氣能時菽蕎麥不<sub>レ</sub>打延し置けば、長雨掛り或は雪掛る也、又蕎麥は隙の時、雪の内に取出し打てもよし、菽は雪消てより外は打事ならず、牛蒡大根蕪菁菜を仕舞には一日を大切に<sub>レ</sub>して晴天を拾ひ日と思ひ、少も無<sub>二</sub>油斷<sub>一</sub>摘み納むべし、若し不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>考<sub>二</sub>天之事<sub>一</sub>今年は節も若く、隨て雪も遅く降るべし杯といふて、兎や角とする間に、やがて雪に逢ひ俄事の様に當惑するは愚之至也、何作なり共、適節に取收めざれば進退破滅の基也、何の年も雪は必ず時節より早く降るものと心得べし。

〔農具〕

第三十 農具器材

正月二月雪の日にも公用の品々並人馬の農具自作に使ふ分を調へ置くべし。若し怠り、其期に至り用意なすに於ては、諸作毛の妨となる。鋤は毎歲新鋤を用ゆるも山郷にては古鋤を燒直してよし。鋤の柄の反働は己の膝頭に比ぶべし。馬鋤の齒は乾田には短く、泥田には長くすべし。

箕、倭字にはあじかと書く、もつこのことなり。

透籠

腰籠

鐵搭

杓

又樹、杷

〔飼料〕

第三十一 農耕馬飼養注意

朝夕廐に立寄、飼料不足或は糞詰内羅等の病催否等の諸養生に注意すべし。

〔農民心得〕

第三十二 農勤本末(二)

田畠石置の畔邊、草切廣場等は第二として、第一の本田を疎にすべからず、俗に新田堀は本田を荒すと云ふ。

〔農村語彙〕

第三十三 農人郷談

田島字 其坪名也、俗疇名共云、亦往古下地名と云ふ説もあり、今越後の國にて下名といふ。

植時 田作作毛定の節に植る。

蒨時 作毛能實りて刈る。

穎刈増 稻麥等の束多く刈。

礫塊 搔田之中に不<sub>レ</sub>摧して有る土。

田塙生 田割ひ、又田打といふ、亦發すといふ。

塊耕 春發し田の新塊かくを塊耕といふ。

新塊搔 塊田へ水を掛け、馬耙にてなづること、又鹿塊。

中代搔 鹿塊と植代の間に搔くをいふ。

植代搔 田植の時にかくをいふ。

搔田塙生 新塊搔たる田、又植代の時塙生ふ。

嘉穂 稻水旱の無<sub>レ</sub>障能實りたるをいふ。

塔交稗 植田の苗連の間に生ずる稗。

苗連 植田の苗並亦塔共いふ。

生相遠 穂粒遠付くこと。

小苗賦 田植時五月早乙女の後に居て苗を賦る者。」

早苗乙女 田植時立女、普通五月乙女と書。

土子(刀彌) 田植時の男。

尻耙取 田探くとき馬耙を持つ者。

塗畔 田のくろ年々鏝<sub>テ</sub>新に塗ること。」

谷地畔 田不<sub>レ</sub>鏝草生る場所。

尻土 田の水尻。

親田 苗代のこと。

遠面 作場或は遠方田面。

萎苗 取苗日當りて葉萎む。

拍子田 笠鉾を立、鼓太鼓打、笛吹鎌の耳を叩く農歌、つまり田植歌を歌ふをいふ。

鳥畦 塙生塊高き所。」

作區 兩畦間低所。

新伏又鹿伏 春初て塙生をいふ。」

畝引蒔 薄く削落て蒔くこと。

疎拔 作毛を幼時拔捨ること。

似字 藁積。

歌 芋の莖又いもしと云、中の白き莖をすいきといふ。」

芦頭總 牛蒡大根等の頭。

産畦 枝畦。

は か 田塙生並に莠取に各人受け持つて働く所。

手直り 田植の砌、苗をかたぶり根付かしむ、植跡隨て直る。」

黒葉付 田植の砌苗黄くなるも後に青くなること。

生葉出 田植後追々稻葉數生出ること。

柄付苗代 苗取たる跡へ稻植立、植蒔代共之田の意。

通苗代 苗取跡其儘置亦來年の苗代に用ゆる田のこと。」

田はか 田植の時押返押もどして植ること。

把 稻一把貳把の小たば。

束 稻小把を取合て大束又は丸にするをいふ。

後れ稻 刈稻一所へ持集めたるをいふ。

五月聲 田植言葉、農歌のことなり。

淘粉 摺碓之米自ら吹出、稗の内に自ら留りたる糲、米糲、稗糲、禾糲、總じて淘粉と云。

糲 米の中の粃又のこと米の惡と云ふ。

楣 又あらもとも云、米のくだけのことなり、農語に云ふあらもとは米籠掛て出る米交の

粃のこと也。

壓 禾粃芒麥等の麁つきのこと之を關東にては壓之春といふ也。

粒米 庭へこぼれたる米。

長 田一枚を云。

片荒畑 作毛不出來する畠の二毛を不作休置て、其翌歲に造ればよし、是を片荒と云、上

畠も年中に二毛作は不宜、二毛作の畠は一毛休、一毛作れば能出來る也、通し苗代は

毛を不作休置、是皆片荒の心也。山下は春雪遲消、秋早寒故一毛作多し。

三草 藍、麻、紅花。

四木 栗、椿、桑、漆。

返作<sup>カシコク</sup> 去年大豆蒔畠へ當年も又大豆蒔くをいふ。」

水帳 田畠檢地帳 配附帳、又名寄帳。

## 會津農書附錄

### 序

此ころ、近里遠村農功有老翁の物語を聞まゝ、又をのれがこゝろむる所をも加へて附録す、本より文字ふつゝかなれば、人の前に見すべきにあらねど、もし農事に志しあらん人、文字をもあらため、無理のあやまりをもたゞし、かつ又農家の便にならんことを書添へたまはゞ、自他の幸ならんか。」

## 會津農書附録

一、老農のいへるは昔は耕作の祭りといひ、正月には雪の上に田を植、麻を作り、其外其所に畢竟して用る諸種作毛のまねをして置なり、今以其例用ひ來るものあり。

一、諸作毛に辰巳風あたるなり、風雨時にかなひ、稻の草生滿作たりといへども、出穂の節厄風吹てさむき時は、一夜の内にもかれいねと成り、粟、稗もかるるなり。又實りて後は厄風計にもかぎらず、大風頻に吹時は、田畑の實共に吹こぼすなり、故に昔は風祭りをして祈るといへり、今以其例勤むる所もあり。

一、稻の虫、會津にては、ほうちやう虫、かうげ虫、なかござし虫、泥虫、根ざし虫と云へり、ほうちやう虫は稻の葉を食ひ、かうげ虫は稻の葉をすべよせて巢を作る。此虫は容大なり、始のほうちやうむしといふ葉をくふ虫は、其體小にして、此虫中頃羽虫に變し、いねの葉を吸ひ、終にかうげ虫と再變す、始、中、終を都て蝗と云ふ。なかござし虫はわらのすいを喰ひ、根ざし虫は稻の根をくふ、どろ虫は稻の葉に附く、又稻にわらうだがれとて、一つ宛丸く根より枯るゝあり、これをいかもち共云、是は根を食ふ虫のわざと見えたり、蠋は稻の末に附て稻穂の股をふみかぐなり、漢字に蠋禾の根を食、

螟苗の心を食ふ、蠋苗の葉を食ふとあり、往古より蝗虫多くつく年は、六月の内に虫送りをする事、耕作の祭と見えたり。

一、ほうちやう虫、かうげ虫は苗を遅く植たる稻に生ずるなり、なかござし虫は苗を早く植へ、不斷ぬる水をかけたるいねにつくなり、どろ虫は雨年に附て葉疵出來る也、他國にて是をはつち虫と云。あけの入の照りつよく、其上に雨ふり大地よりむし上る時に入る。いかもち晝はつよくてり、夜はわるいきれの時、葉に黒ぼし附てかるゝなり。

一、老農のいへるは、苗を遅く植へたる稻に虫の附にも譯有、種子を遅くまきて其苗柔成を遅く植れば虫附なり、種子を早くまきたるその苗は遅く植ても虫附ぬとか、此を考るに、農書本文に記すごとく、種子をまくにも時有、日積りあり、早く蒔きたる苗は苗代にて定れる日數を受る故、苗こはく、遅く植ても虫の附かぬ筈なり、必種子のまき時を怠る事なかれ。

一、田植時分に早魃にて苗代に水絶へ、土白干に成れる所へ水をかけて、其苗を取て見れば萎れて居り、試にこの苗を植て見るに、別に障もなく、常の苗うへたる稻のごとくそだち、實入もよしと老農のいひ傳へり。

一、關東は常に水不足故、猶ひでの年は田植兼る事度々有と云、左様の年は六月土用入て十日めつ雨を待て植るなり、定て十日目には雨ふると云傳へり、此雨を限て植れば常の半作に實るとか、此十日

を過て植れば少も實らず、苗のたけのびたるは末を切て植るとなり、會津は早魃の年なりといへども、終に田を植ずして置事もなし、又土用の内植たる事もなし、然共自今以後には何様の時變もしれず、唯田を荒してすつべきならば、半作取てもよし、左りながら關東は暖國なり、會津は寒國なり、一同にはこれあらじ。

一、或人の云、稻に牝牡の二ツ有、早苗の時めなへは稻葉廣くしてしだれ、をなへは稻葉ほそく針のごとくすだるなり、植て以後實るを見ればおいねは靱粒小き故に、おいね多く交りたるいねは取石鮮し、種子取る時稻穂にておいねの粒を撰み除くか、又靱にして小粒をふるひおとしてよしとかいへり、牡稻のわけためして見ざれば信じがたし、これを案するに、おいねに實のなる事はあらじ、其年々にめいねの内より生ずるなるべし、扱てをなへの細きを以て思へば、靱の小粒なるは尤なり、小粒と云もいぶかし、一穂の内にも生るか別穂に生るか、是又知れじ、誠に種子拵農書本文に記す如く、何たねを取にも小を除大を取れば、おいねの小粒をゑらみ除かすとも、むら苗雜らずして、稻の取石多かるべし。

一、老農のいへるは、今年上出来したる田は來年の作不出来するなり、又不出来したる田は來年上出来なり、散田地などを請取ならば、其わけを見届くべしとなり、げに上出来の次の年は地汁を吸はれ、やせ地となるべし、不出来の次の年は地汁も残り、又片荒しの心にてやすめ置たるに同じ、尤上出来

成るべし。

一、洪水の時は山々より木葉のくさりたるを押流し、上方の小川よりごみ流るるにより、固き田にも自ら河ごみたまり、土地肥えて、其年は云ふに及はず、二三年の内は稻の出来宜しといへり。

一、かね山より流るゝかねあらひ水は田地にかけてわるし、かね氣の有水はわるしといひ、又あら土のやせ土をあらひ流す故、不作するといへり。

一、老農の云へるは、何稻草も相續て年久敷く作れば、末には悪敷となり、或在所にて小女房種をゑらんで廿年餘作るに、始の程は取石多く、中頃より段々衰へて後には不出来し、それをやめて坊主、三助をすぐりて十四五年近くも作るに、其砌は餘の稻より取石宜しかりしに、次第に減し、是をも大半やめて今はほつこくを專に用るなり、此を以て見れば、何れの所も同事なるべし。

一、田の水かけ様、寒氣の年には折々水を干し、稻穂出兼る時は皆干して日にあて、土をあたたむればよしとのこと農書本文に明かなり、もとより濕地の冷田、ごみ深のひどろ田、又常に水たへぬ田を好む稻草は不斷水をかけ置がよしと計、皆人心得て、稻はらみ揃ひたる頃より打續き雨降、さむき年も始終水をかけ置くに依て冷立に成也、何稻草もさむき年には江添通の水口の田も少し宛は立ものなり、まして晩稻の内の又晩稻は丸に三よさに立と思ふべし、能々其年の位を考へて水のかけほしを大事にすべし。

幕内農業記

會津農書附録

一、農書本文に不<sub>レ</sub>倚稻種と記すごとく、當分の取石に迷ひ、一品計り作るは宜しからざるものなり。

一五四

幕内農業記目錄

第一 諸作節積之部 ..... (一五九)

第二 茄子之部 ..... (一六一)

第三 瓜 之 部 ..... (一六四)

第四 大根 之部 ..... (一六五)

第五 蒔物 之部 ..... (一六六)

第六 萬種子物之部 ..... (一六九)

第七 養 之 部 ..... (一七一)

第八 瓜、茄子水植之部 ..... (一七二)

第九 苗代 之部 ..... (一七三)

第十 田人夫之部 ..... (一七五)



# 幕内農業記

## 第一 諸作節積之部

- 一 茄子苗、胡瓜苗三月節を二日前にふすべし
- 一 夕 顔 右同斷
- 一 牛 蒡 同四日目
- 一 ワセ瓜苗下地へ小便灰こえ置 右七日目
- 一 苗代うなひ 三月中を三日前
- 一 雪の下大豆まき 右同斷
- 一 苗代あらくれかき 三月中
- 一 茄子胡瓜生ゆ 三月中
- 一 屋敷白瓜わせ瓜ふせ 三月中を五日前

幕内農業記

- 一 胡瓜下地にこえを置く 同日
- 一 種子揚 同日
- 一 外畑早生瓜ふせ 同日木綿蒔
- 一 苗代ならす 四月節か五日前
- 一 奥瓜ふせ 同日
- 一 種子まき 同日
- 一 胡瓜屋とひ(手をくれる)同日
- 一 わせ瓜代にこえを置く 四月中旬か四日目
- 一 茄子下地にこえを置く 同八日目
- 一 飼大豆中手大豆油荏 四月中旬か三日前
- 一 小豆ひゑまく 右同日
- 一 わせ瓜屋とひ 右同日
- 一 飯寺堰上 四月中旬か五日前
- 一 外畑茄子うへ 同日
- 一 奥瓜屋とひ 四月中旬か六日目

- 一 ごま奥大豆瓜邊にまく 同八日目
- 一 なんばんうへ 同日
- 一 早稻田植 五月節か三日前
- 一 胡瓜出来 五月中
- 一 茄子出来 六月節
- 一 熟瓜出来 六月土用入日
- 一 蕎麥まき 土用三日掛
- 一 大根まき 七月中旬か五日前段々
- 一 三月大根まく 秋彼岸一日かけ

### 第二 茄子之部

一 茄子種子手入彼岸廿日程前より苞へ入れ、いろり火焚ひ所より一尺ほども遠くへ生けをき、一日置にほり出し水気なくば水へ浸し又押入置べし、蒔ざる已前は無き油断二見るべし、つと敷いくつにもして一日二日置に段々もやしてよし、其内餘り長置に成り、役立ざるは捨てても損はなし、ふせ

場隔年に取替てよし。

一 ふせ候時、段々のつと皆揚集、一つにもみませふせてよし、種子澤山にとり置、厚種にふせてよし、其内早く生立を立置、厚く生え候はゞ、段々おろぬき捨つべし。

一 茄子苗春彼岸の内にふすべし、大雪にて遅く消る年はふせ場の雪を掘除、彼岸過ても雪消次第ふすべし、雪ふらすとも餘りはやくふすべからず、見合せるがよし、五日十日早くふせても土冷候得者遅く生ゆるなり、大雪の年五日七日遅くふせても次第に土暖にして、植え時は遅成ても百五の霜前後植るがよきなり。

一 茄子ふせ様は土を細にして外畑の土砂をはこび、種子の上へ壹分半程もかけてよし、其上にぬかを土色見えぬ程ふり、こえをぬり混せるべし、もみひ時能こはしてよし、こえの下へぬかをふる事、こえへ土附ざるためなり。

一 目切れ根が土へ少々差込候時、こえをはかり脇へ取置、三ヶ一程細にもみこはしふり掛へし、残二ツは茄子苗生立ち次第段々二度計に掛てよし、中葉出ひ時、荏粕細にして二度も三度もふり掛べし、茄子苗代は隔年に取替べし。

一 茄子こえもみ候天氣能く候はば、毎日水をかくべし、生立候ては猶不<sub>レ</sub>怠水掛べし、大雨ふらば覆をすべし、少々雨降りには不<sub>レ</sub>掛てよし、大雨掛り候はば打かため、そだち悪し、取わけ東風にて大雨

ふらば、決而掛べからず、西風にては雪降事有、先年東風にて大雪故、ふたせざるに茄子苗中葉二葉宛出候時、雪五寸程ふり、一日半計消えず、致方なくやはり消次第にして置候茄子苗死切れもせず、色赤く成、十日計そだち兼、其年は茄子遅く出来候なり。

一 同生立候はゞ、虫付候に氣を付、朝夕行きて見るべし、虫は黒根切の様成、少し赤めの虫也、壹疋つけば一夜に一尺廻程も喰ふなり、取様は日暮、夜に入、火を燈し見れば喰居也、每晚取捨べし、賢き虫にて、晝はとまの中にかくれ居、夜々出て喰ふなり。

一 茄子植代畑中切仕様、さくへ土を打こはし、さくを淺くして、もつくれ一尺七八寸置に取、其上へ下こえを置べし、もつくれ穴を明、こえ置たるは干兼てわるし、十日程已前にこえ置べし、五日三日の前はこえ干かぬるなり、なまこえに植てはやまひ出て悪し、十日を限べし、植てくるめ、茄子間に四五本宛大根植べし、うね脇へ植たるは悪し、茄子と同じく幾度もくるめてよし、くるめざれば作に草生大根宜からず、大根はねりま種不<sub>レ</sub>曲よし、江戸大根は曲て悪し、茄子植て三十五日目に花咲、七日目に花散る、花落て七日目都而五十日目茄子に成、但六月節に當つて出来るなり。

一 茄子苗の中へ白瓜蒔べし、貳尺程置き一所二十粒計宛(生種子)きたねにて蒔、生立次第、そだち次第、一本立べし、早く出来る也、一尺に成候時、段々に芯を留てよし。

### 第三 瓜 之 部

一 瓜苗のふせ様は茄子苗を土少厚くかけ、生たねにてふすべし、上へ下ごえをぬり、目きれて根土へ少々差込候時、こえをもみくだきかくべし、生え出ざる前に水掛べからず、尤雨一切掛くべからず、生出でかつら葉に成候時、天氣能ば水掛てよし、生ざる前に水掛ては種くさる也、生えて後少の水はかけても不苦、大雨ふらば覆すべし、中葉出候はば段々おろぬき捨べし、屋敷の内にふせ、打敷に入置、覆したるがよし、外畑にふせて蓋たの掛はづし不宜。

一 瓜作畑へは春厩ごえを掛べし、その以後は霜の覆すべし、百五過ても雨の上りに西風吹、手こぐへなば何を置ても、瓜に厩ごえを一つかみ蓋にすべし、こえなくばわらすべくづにてもよし、元祿九丙子年舊冬より雪一切ふらず、翌春百十二日目に瓜中葉二葉宛出候時大霜降、皆枯る、我は皆ふたをして一本も雪に不逢、或人日頃酒をすき飲申候、此節酒に酔其身暖にして風の寒を忘れて霜は降間敷とて、我大切に蓋するを見て笑氣に致候、然るに翌朝大霜けしからず降り、土しみ上り、瓜は不殘枯れてくき計残り、十四五日程相過て漸ほき出る故、不植共遅成、茄子の出来遅きなり、其年予かこひ置候古瓜種子近郷之用に立つ、人向後は酒飲まじきといへり。

- 一、瓜蒔早ければ草に押ふせられ、瓜つるやせるなり、瓜六七寸程に成、四方へはい出る時つるをまき平め、大根うへてよし、大根はねりま植べし、江戸大根は曲てわるし、六月土用入がよろしきなり。
- 一 胡瓜苗は茄子苗と一同に生種にて東の方に切ふすべし、土は茄子苗より少厚貳分程に掛てよし、こえは茄子苗より少薄くかくべし、こえもみ候時節は茄子苗同然、種子は段々古種用べし、古種子は實能くなるなり。
- 一 胡瓜屋とひ(胡瓜の手)時節は中葉一葉二葉出るを見てすべし、二度程くるめ、手くるめして、また兩くるめして胡瓜のたけ一尺五六寸に成、手出る時柴を立べし、餘り早く柴を立れば、ひかげに成、やせて悪し、五月中に胡瓜出来るなり。

### 第四 大 根 之 部

- 一 春大根は雪消次第江戸種子蒔くべし、江戸種子はそだちよし。
- 一 秋大根は江戸種子のかへり地種子よし、生たち、中葉出れば追々おろぬき、幾度もくるめ、作へ厩ごえ引込べし、蒔時節は養の部に有、毎朝葉虫取捨べし。
- 一 三月大根はねりま種子蒔くべし、秋の内おろぬき置てよし、宵年作へ厩ごえ引込くるめ置べし、

小便度々掛べし。

第五 蒔物之部

- 一 牛蒡は薄まき、蒔く時水ごえ掛てよし、後段々厩ごえ作へ引込、くるめてやしなひ、後は不要。
- 一 飼大豆は中手大豆を蒔くべし、青引に引き其後へ蕎麥を蒔故、五七日も前にひきてよし、黒大豆、常色大豆は晩生故、やはらかにても日數多くかゝり悪きなり。早く引、五七日も中切してやすめざれば、蕎麥の出來悪し。
- 一 ごまは種子厚く蒔きておろぬきてよし、失せるものなり。
- 一 中手大豆、奥大豆壹反に四升、麥のなかへ蒔くべし。
- 一 きびは右節積りよりはやく蒔くべからず、早くまけば畑に延びて雀の食になるなり、またあまり遅ければ不登、取石すくなし、きび穂に出で下伏候時は、かがしすべし、案山子には麻のわくそを二筋より合せ、墨にて染、竹竿を立、右之糸を引張、所々に鳥の毛を結付、風吹きふは／＼とすれば鳥恐て不寄、其外の案山子は様々のまねしても一切無効なり。
- 一 なんばんからは五六寸置に蒔てよし、養なしに植、後に水ごえか小便灰か、厩ごえか掛てよし、

- 一 荏は取石すくなし、作るべからず、打つに人手間多く要るものなり。
- 一 稗は四五反程宛毎年蒔くべし、馬のはみに用てよし、麥計は不<sub>レ</sub>宜、稗をませ煮候へば、悉く食ふなり、またそのからは、冬中大豆葉等にたゝきませはみにして宜し。
- 一 大豆の葉は常葉に成り取べし、はやく取るべからず、取石大いに落つるなり、日照の年は葉取らざるがよし。
- 一 夏土用前後に馬のはみに、山方より芝草刈り置べし、馬のはみに秋よく乾せば、大豆の葉より馬好くなり、大豆の葉取よりは人手間を以て心がけ、夏草からせてよし、過分に刈置は春に至り馬のはみつきず、女の手間かばひ、其上葛の葉等不買、錢つかはずしてすむなり。
- 一 木綿は土を薄く少々種子見ゆる程に掛てよし、養は小便灰よし、種子水に一日程浸、蒔時水より揚、あくにくるみ、成程厚く種子を蒔べし、うせる物也、扱生立五寸程に成候時、間五六寸程置きおろぬきてよし、長く高きは抜捨べし、夫より芯を二度三度も切捨べし、其芯畑に捨べからず、虫を生じ本を喰なり、持出して捨つべし、多くは作るべからず、三年置に違ふ作なり、違へは一切不<sub>レ</sub>取なり、然者年貢の障ともならん。
- 一 さゞげは種子厚く蒔べし、薄きはつるに成り、實生らざる也、から畑がよし。
- 一 赤大豆は薄く蒔べし、厚く蒔けば實生らず、から畑に蒔てよし。

- 一 蕎麥は壹反歩に四升蒔、青引大豆の跡に蒔べし、又大豆跡へ蒔けば實取れるなり、壹反計宛は大麥跡に蒔べし、さくへ厩ごえ引込、其上へ打込に蒔き、土掛くべし、取分日照の年は土厚く掛け、中へ打込てよし、毎年六月土用三日かけ蒔くべし、遅く蒔くべからず、正徳二壬辰年世間一統霜に逢、種子程もなし、然るに予節積り之通り蒔、豊年の通り取れたり、向後怠るべからず。
- 一 にんじんはわせ瓜、白瓜の中へ蒔きてよし。
- 一 きび、ひるはおろぬかざる様に成程薄く蒔くべし。
- 一 里芋はから畑よし、大麥の中へも植る、春芋種子おこし、久敷不植して置べからず、間もなく植ゆるがよし、頭芋は別にして一所に植てそだちはやきにより、秋早くおこす也。子芋は一所に植べし、頭と子を一同植交ても八つ頭は早く生出、他の子芋は遅く生出故、先に生たるは大きな芋の陰に成てちぐはぐになり悪しき也、頭は頭、子は子に別々に植てよし。
- 一 裏屋敷胡瓜跡のかぶなは土用明て二八日半に蒔べし。
- 一 あみなは四八日過てもよし、少々遅くても養澤山に掛け蒔けば、そだち早し、早く蒔きても養少ければ葉黄く遅蒔に劣るなり、惣ての作、養よければそだち早く、五七日遅共追付物なり。
- 一 ちさは十月植てよし、種子は裏屋敷の菜まく時、菜の中へふりおき、十月に至り苗をうへ、疾とふみ付くべし、かたくふみ付けざれば、冬しみ上り枯るるなり、西東のうねに作り、南の方日向に植べし、春植は出来遅し。

- 一 夕顔は茄子苗の中へ茄子苗ふせる時植べし、間貳尺計置がよし、種子は前かど十日も已前にうるかし、つとに入、いろいろの中へ押込置、もやし植てよし、生立壹尺四五寸程に成たる時、芯を留べし。

### 第六 萬種子物之部

- 一 三月大根種子はねりまを厚蒔付にして、翌春に至り先にたふに立を段々引、たふに不立分を残し置、間五六寸置に立、六七寸にもたふ出候時芯を切べし、芯出たる種子は蒔てたふに立なり、脇より出たる種子蒔時は、たふに不立なり、是秘事なり、度々見廻り虫を取べし、扱實成種子取時、小刀にても段々見合切取べし、跡に取たる種子上々なり、是を三月大根の種子として蒔べし。
- 一 江戸大根種子取様、右に同じ、年々種子替るによりその都度種子大根吟味すべし。
- 一 菜種子上へ拔上りたるはかぶな種子なり、なりのよきを撰植てよし。
- 一 にんじん種子は黄色よし、白きは不宣、たね植るに黄色計るり植、翌年花咲とき度々虫を捨つべし、芯計の種子黄色なり、小枝の種子は白くかへるなり。

- 一 牛蒡種子宵年掘残し置いてよし、實る時度々虫を取捨べし。
- 一 芋種子秋天氣能時分一かぶ宛土をはたき、こえ舟に入運び、川原より砂を取寄て砂に漬る。芋一通り置、砂を置、段々幾度も置べし、但芋がらは前度に対するべからず。
- 一 茄子種子は枯れ盡きたる茄子の木を見合て二三番茄子を取るべし、元成不可取、元なりは實すくなく、又古種子は不用立。
- 一 胡瓜種子三番生りより上を取べし、元生りは種子一粒もなき物也、うらなり程實多く有物也、胡瓜は年に寄一番なりも取らず枯す事有、上出来のとし種子多取置、たくはふべし 三年迄は古種子用ひてよし、熟瓜種子同前也。
- 一 大根種子三年まで古種子よし、四年目より不生。
- 一 菜種子も同前、四年目ならば不可蒔。
- 一 大豆、油荏、赤小角豆、稗、きび、一切古種子不生、去々年取候種子不生也、去年取候種子は新種子と云ふ
- 一 牛蒡たねは古種子たふに立つ故、用べからず、去年取候たね用べし。

第七 養 之 部

- 一 田壹反 厩ごえ四拾束に、下ごえならば八舟、油荏粕なら八斗、焼酎粕なら今上八俵 古粕十二三俵
- 一 瓜、茄子作畑へは霽秋か心掛厩ごえ掛べし、厩ごえ掛されば縦下ごえ多掛ても不出來するなり、下ごえの量數計難し、多く掛たるがよし。
- 一 秋大根壹反に焼酎粕壹俵半宛掛てよし、粕惡敷ば貳表もかくべし。
- 一 菜は壹反に厩ごえ拾貳駄掛てよし、中手大豆引ざる前大豆の中の、さくへ引込みて後ち土を掛くべし。
- 一 三月大根と冬菜へは生立中葉出候時小便直に掛べし、ちいさき時直に掛れば枯るるなり、ちいさき時はさくへかくべし、但小便灰よし。
- 一 茄子植て赤虫付、根切喰、度々植替、茄子やせたるには茄子の葉の上より小便直に掛べし、小便灰は一つかみ宛茄子の根へ掛べし、早く直るなり、下ごえ、水こえは急にはきかざるなり。
- 一 厩ごえはまるきて、春かた、雪の時、櫛にて田畑へ引込べし、人夫の力いるなり。
- 一 田へ焼酎粕かけなば、植前五三日にすべし、畔さくぬり候はゞ兩度に掛け、うるかしたるがよし、

植る時に掛ては、うるけざる故、むらごやしになり悪し。」

### 第八 瓜、茄子水植之部

一 瓜、茄子植時雨ふらずば水植にすべし、水うへとは、植候所へ朝植るならば、宵に澤山水掛置事也、晩に植るならば晝下りより水掛置、地しめりたるに植べし、水氣ひかす土こぼり候處へ植たるは悪し、大雨降時も同前と心得べし、大雨にて水地へ引ざるに植たるは大いにやまふて悪し、何程の日照にても水植にすればよし、雨上り水植共に水引もみ土、さら／＼とするととき植てよし。

### 第九 苗代之部

一 苗代に種子蒔は一日も二日も前にならすべし、苗代くろならしは五日程前にしてよし、尤いなすべも其節取べし、苗代くろむき様は薄く上を平にむくべし、それを立むけば行にふみこはれて悪し、畔太く取べし、畔は種子蒔と水見に毎日行く所なり。

一 種子壹俵に貳斗貳三升宛入、藏へ入るべからず、天井へさげ置べし、乾く程よし、彼岸入口に浸し、川に三十日、おかに十日、土用三日掛蒔べし、早く蒔けば違なり、若種子早く出来なば、俵を蒔へあけ、押並し、二三日まへ、朝かた水をかけ、半時程経て蒔べし、水がこせば浮て流る、蒔て三十五日目に移植す、植て七拾五日目に米出来、是定法也、種子浸日より百五十日目に當る、凶年、下作の年は下百日といふて、十日も十五日も遅く出来るなり。

一 糯種子毎年取時穂にて撰るべし、出穂のはなにゑり穂と拔穂すべし、毎年もちうるにかへる物なり、今年うる穂一穂有れば、翌年は百穂にふゆる。此儀忘るべからず。

一 種子蒔て五七日も相過、針苗にならば、五日も七日も水乾すべし、晝乾し夜掛くべし

### 第十 田人夫之部

- 一、田打壹反 貳人
- 一、くれ返し 壹人に貳反宛但あらくれ、くろ切くろ取定なし
- 一、壹番草取 壹反貳人
- 一、貳番草取 壹反三人 但稻刈定なし
- 一、こぐ壹人に 七束宛但相場に米拵ふる日、俵はあみ渡すなり、ゆひ繩はこきての請前さんたはらとも



一、 粃にこぐ壹人に拾束宛

右當村農業記予四拾餘年之間自發耕耘之働をなし、作之手立、時節をこゝろみ、登實成熟之善惡を勘辨して決定する者也、會津農書に委敷成といへども、大冊其品多、且暮見る事かたし、依之幕内農業記と名付て記之之畢。

正徳三年癸巳仲春九日

佐瀬林右衛門

備考、本書の裏表紙に『延享四卯九月卅日佐々木利右衛門寫之』とあり(校訂者)。

會津歌農書(上・中・下)

## 會津歌農書序

夫農耕の事は我朝神代の古の

天照皇太神の御時より有來、唐土にては神農氏始て耕を教へたまひしにより、神農と號し奉りしとなり  
堯帝の御時、后稷稼穡の事に達しぬれば、農師となしたまふとぞ、元朝に至りて東魯の五禎といへる人  
農書を撰して今の世に傳り侍る。農は四民の其一つ、其業もまた闕べからざるものなり。予元より賤の  
男にして不知不才の身なれば、唐倭の古き書の事など知るべきやうなし、たま／＼もの知れる人の物語  
したまふことなど、なま覺ながら書付置き、かく記し侍ぬ。都て農書はやすうして難く、かたうして成安  
きもの也。我叟吠の中に生れぬれば、少より老にいたるまで農事を營み、昔より云傳へし諺の數々、朝  
な夕な試みぬれども、さのみに自得したる事もなく、徒に老農といはれしのみなり。漢土の大聖孔子に  
農稼を學ばんことを問ふ人あり、夫子之に答へたまふに我は老農老圃にしかじとのたまふを聞傳れば、  
年久して農稼に心を盡せし者には少しく其功もありなん。唯農は氣候正ふして土地の肥たるに過じ、し  
かあれど、其國其所により寒のはやきと、暖のおそきと、土地に應ずると、應せざると、風雨の時を得  
ると得ざるとにより、五穀の熟不熟あることなれば、其さかひをよく辨へ知りて勤め行ふこそ肝要なる

べけれ、まのあたり田畑の諸作天地雨露の恵を得て生長する事當然の理なれども、又農民培養の力をか  
らざれば實ることを得ず、是三方並び育まるゝ所顯然ならずや。よく農事を勤め、五穀豐饒にして、田  
畠の貢物を國君へさげ奉り、其餘分を以て家人を養ひ、飢渴の苦みを知らざる者は、堯舜の民の井を  
堀て飲み、田を耕して食ひ、腹鼓を打ちうたひしも異世同情のためしならむか。予年月試み置し事、く  
さ反故の裏に書付置しまゝ、終には破れ障子をふさがんもあたら事とおもひ、日々手に犁、鋤をたづさ  
へ、田畑を枕とせし暇、會津御領内山と里との農事、春耕し夏耘り秋の收めに至まで、其業都て三巻は  
書集會津農書と號し家にかくし置けるを、いつとなく一邑一郷の人の見聞に及び、終に官府にのぼり聞  
へ、此書諸有司の御一覽に供へ御褒美として米など給はりけり、家の面目身の冥加まことに難有ことい  
づれか之に過ん。或人予にいへらく、吾子の農書件々の文言打續き、永々しく見る者そらんじがたく、  
倦やすし、願くは大和歌につゞりなば、見る人覺へやすく、或は感發これありて、をのづから之を習  
ひ其子うまる子農家同志の益にもなりなんといひし程に、予も亦實にもと思へど歌の道しらす、其習ひ  
なければたやすくよみぬべしとも覺へすといへば、或人又いへり、むかしは花に宿る鶯、水にすむ蛙ま  
で歌を讀みしとなり、いはんや人間においておや、心を種とし萬の言の葉となれりとなれば、農家に生  
れ付し郷談を以て歌よまば、里々の農事教訓にもかなひなんとすゝめけるまゝ、閑暇の日老後寢覺がち  
の折からひたすらよみし程に、農歌積りて一千六百七十餘首に及べり、全三卷となし、會津歌農書と名

付侍る、見る人言葉を以て心をそこなはず、農談の一助とし給はば幸甚なり。

豊葦原千五百秋瑞穂國は天地と共に開け、七五之神、天照大神の御代に至り、天熊人、奉進之五穀物者、顯見蒼生可食而活之也、乃以粟稗麥豆爲陸田種子、以稻爲水田種子、始植于天狹田及長田、其秋垂穎八握莫然、甚快也、稱之瑞穂之國號誠ある名、豊年の民の榮えはむべ神勅の仰ぐに高き恵にぞある、かくなれば天益人永く蒙神恩、稻は命のね、米は神靈をこむるの和訓にして、之を耕し作る程に農夫をして天か下の百姓とは名けたり、干此會津郡幕内の村長與次右衛門佐瀬某、壯年より心を農稼にひたし、其くはしく叮嚀なる歌農書先人之序跋あり、平素稼業を要とするの閑暇、農歌一千六百七十餘首を綴て六冊となす。其言葉たらず、すがた賤しきは、田夫にあひたる心を種として云出せる成べし。凡歌はうたふるの訓なれば、唯已か情を述るにしかじ、これやこの農書四つの時をわかち、春は四方の氷も解て水の引く時に鋤返す、千町田に折立田子の夏は土さへさける日ねもすに耘り田草取しかば、いつの間にか稻葉色づき、秋は小田守袖に置あへぬ露より霜の小庭に刈納めたる、冬こそ猶いとまなき業をなんあはれにもつぐり侍る物ならし、昔時、天曆之帝の我衣手は露にぬれつゝと民をあはれみ給ふ有かたき御心を思ひわかで、無貴無賤粒々の辛苦をあくまでに喰ひ、慢りに其本をわすれ、今も畔を毀ち、重播種子の罪人ならまし、且此人農事に力をつくすのみかは、會陽孝子傳にも善行を稱せり、此書衆民至寶として習之學之ば、五穀豐饒神の隨意、子孫の富榮え窮りなからんことを、干時下官卷首に假名序つかふまつれと。

會津歌農書 上之本 目次

田 部

第一	田植手段	(一七)
第二	田植ゆひ附古歌	(一八)
第三	田植附郷談	(一八)
第四	雨中田植	(一八)
第五	朝田植	(一九)
第六	古朝果敢田歌	(一九)
第七	晝田植	(一九)
第八	古晝果敢田歌	(一九)
第九	夕田植	(一九)
第十	古夕果敢田歌	(一九)
第十一	田歌	(一九)
第十二	畦田植	(一九)

第十三 五月乙女果敢持樣附鄉談……………(一九二)

第十四 五月乙女……………(一九三)

第十五 田子……………(一九三)

第十六 蝶取……………(一九三)

第十七 小苗賦……………(一九三)

第十八 田埒附鄉談……………(一九三)

第十九 田植三七日間早苗變化……………(一九四)

第二十 早苗分離附鄉談……………(一九四)

第二十一 早苗分離祝附湯息……………(一九四)

第二十二 早苗分離寄果敢附鄉談……………(一九五)

第二十三 大早苗分離……………(一九五)

第二十四 植田……………(一九五)

第二十五 夏田……………(一九五)

第二十六 朝草刈初……………(一九六)

第二十七 田暇養行……………(一九六)

第二十八 里郷籾草附銀留……………(一九六)

第二十九 山郷青刈敷附錄留……………(一九七)

第三十 坎暇……………(一九七)

第三十一 川堀泥土……………(一九八)

第三十二 牛馬野飼時節……………(一九八)

第三十三 里郷野飼附馬見……………(一九八)

第三十四 山郷牧馬附野飼……………(一九八)

第三十五 苗代水……………(一九九)

第三十六 堤水量……………(一九九)

第三十七 田水……………(一九九)

第三十八 田水見……………(一九九)

第三十九 水見歸利得……………(一九九)

第四十 稻花開落遲速不同……………(一九九)

第四十一 濕田水……………(一九九)

第四十二 燥田水……………(一九九)

第四十三 夜水引……………(一九九)

第四十四 耘……………(一九九)

第四十五 夕涼附古歌.....(109)

第四十六 鄉 談.....(109)

第四十七 山 田 耘.....(109)

第四十八 蝗 虫 捕.....(109)

第四十九 難 捕 捨 虫.....(109)

第五十 蝗 虫 送.....(109)

第五十一 蚊 如 雷.....(109)

第五十二 蟬.....(109)

第五十三 稻妻附早稻子.....(109)

第五十四 田埒間稗附鄉談.....(109)

第五十五 秋田附古歌.....(109)

第五十六 稻 異 名.....(109)

第五十七 早稻附穗懸.....(109)

第五十八 案山子附古歌.....(109)

第五十九 鳴 子.....(109)

第六十 稻 守.....(109)

第六十一 稻 稔.....(109)

第六十二 稻刈時附刈行.....(109)

第六十三 稻 刈.....(109)

第六十四 穗 末 田 刈.....(109)

第六十五 月 前 田 刈.....(109)

第六十六 刈 稻 立 樣.....(109)

第六十七 稻乾附鄉談.....(109)

第六十八 稻 揚.....(109)

第六十九 稻 束 連.....(109)

第七十 馬 荷 繰.....(109)

第七十一 落 穗 拾.....(109)

第七十二 稻似字積所.....(109)

第七十三 稻拔附鄉談.....(109)

第七十四 肥 過 田 位.....(109)

第七十五 卑 泥 田.....(109)

第七十六 土 位.....(109)

第七十七 田附疇名下地名……………(三三)

第七十八 水田陸田位分附郷談……………(三三)

第七十九 燥カツキ田……………(三五)

第八十 村 尻 田……………(三五)

# 會津歌農書 上之本

## 第一 田植手段

苗本や埒あひまでも能つもあり田面の中をはかり植べし  
 出来過は苗本薄く四角田に埒あひ遠く植てよきなり  
 やせ田には埒合遠く苗面ナヘツラをきむるぞ農のてだてなりける  
 根を深く苗腰折て植えぬればいたむ故にぞ育ち兼ねける  
 水たまる窪田の稻はいつとも老たる苗を大本にせよ  
 苗もとに多少はあれど植て後田連カマの見えはさのみかはらず  
 もとの苗を其まゝ植えてそだてたる稻のみのはかひなきぞかし  
 時來ても田をば一度に植るなよ風雨變化も計りがたきぞ  
 何稻も都て日數はさだまれりいそぎ植なばはやくみのらん

第二 田植ゆひ附古歌

田植るに結とはおよそ人の手間かりつかられて勤めぬる事

古歌 此さとはゆひする人のなきやらむ

三節たつまで早苗とらぬは

第三 田植附郷談

植る田もいばらの花ももろともにけふぞ盛の折と見へける  
遠路近路の田の面あらはにうちむれて賤か田植の賑はしき哉  
いひしるや黨人だてとは賤か田をやとひ人して植る事なり

第四 雨中 田植

五月雨の降るもいとはしきなくとも植る袂のぬれけるものを  
けふはしもたま〜そ〜雨なれど植ゆる田面へふるぞうたてき

第五 朝 田植

天の戸の明ると共に起き出でて田植を急ぐ賤の雄々しき  
此ほどは絶えず聞くなり朝明の外山のすその田子の聲々

第六 古朝果敢田歌

押せばぎりやうとなる 蔵の戸をあくれば  
こがねの樹を手に持て しろきよねをはかる  
ざらりざつととがばや せどのたな池にいれ  
七かまへ水汲み入れて うばに火をたかする  
こがねのへらをもち 七かまへたちより

第七 晝 田植

しばしとてやすむいとまをしがほに田子はてる日の中を植けり  
いそぐともひるのかて飯つかふ間は心をのべて先つ休めかし



第八 古晝果敢田歌

ひる飯もちがたらないで 京から女房買くださ  
 何貫ばかりに買くださ 三貫六貫八百兩  
 晝飯持の衣裳は はだに白地紅梅  
 高麗べりの疊には 座敷次第居次第

第九 夕田植

五月乙女の植る田面はにぎはふも日は山の端に落て淋しき  
 今日の日もゆふべになるぞ今少し植て去れかし土子や五月乙女  
 植後れあがりおそしと思へどもつもりの田坪残しをかれじ

第十 古夕果敢田歌

七つのさがりから 妻は戀しからもの  
 雀だに戀をして 鴨が池へかよふ

日暮るれば千鳥めが 笠の端をめぐる  
 あしあらひ何こそ 小手はわすれた

鳩鳴聲古詩曰

日夜溪頭布穀聲  
 屋さしくも農事をつぐる鳩の聲  
 たにのほとりに布穀とぞ鳴  
 あひにあひて鳩の鳴聲もろともに  
 小田のさ聲のにぎはしきかな

第十一 田歌

賤が田の植時も今やをちこちにうたふ田歌の聲ぞきこゆる  
 おくれじと植るやいとまさをとめのうたふ田歌にこゝろいさみて  
 五月乙女も小苗くばりもをしなべて歌をうたふは田植いはひぞ

第十二 田植

五月乙女の心いさまむわけてこのはやし田のみはにぎやかにして  
五月乙女の心いさみて植渡す其手廻しや扱もはやし田  
たのしげにはかは行くなりはやし田の拍子につるゝ田子の足なみ

第十三 五月乙女果敢持様附郷談

五月乙女のつらもみださぬ鴈行に農のしはざの正しさを見き  
見ればげに姿揃ゆる五月乙女の鷗歩並びのうるはしきかな  
鴈行につれて植たる廻しばか鷗歩ならびを眞果敢とぞいふ  
人なみに手もとをろさぬ五月乙女は廻しばかにぞ坪入をする  
あとはかに植込まれたる五月乙女は出口なきゆえ坪入といふ

第十四 五月乙女

立出でて見よや五月の乙女子の其糞ひぞ色めきにける  
よそめにもいとぞゆかしき五月乙女の昔の小笠の内やいかにと  
五月乙女の其いでたちはひとしほに我がものがほに見へてゆかしき

五月乙女のつらねし袖も匂ふらしいばらの花のひらく田面に  
五月乙女の笠の端なみにまひとびて何をあさるか鷗のひとむれ

第十五 田子

五月田をうえて働く賤の男を田子といひけりまたは土子とも

第十六 縹取

代かゝば馬のはなとり心得よ立てよやれよのほどをよく見て  
すぐに行時こそやれと聲かけよ馬をまはさば立てよ縹取

第十七 小苗賦

植る田のはかゆかなむも後るゝも小苗くばりの手だてにぞよる  
田植ゆるにこなへばりとは見廻して小苗くばれる事をいふなり

第十八 田埒附郷談

四隅結ふて植し小苗の埒は又更に正しき田の面なるかな  
横堅にうえはたしたる苗づらや元來之をらち(埒)といふなり

第十九 田植三七日間早苗變化

田うえせしみぎりはいつも苗腰のまがりて見ゆる根付ざるため  
植るときまげし早苗の手直しはいつも七日の内とこそ知れ  
うえてより二廻り目に至るころ小苗は赤く色かはりけり  
三廻りの廿日一日といふときに苗はまことの色となりけり

第二十 早苗分離附郷談

此ころの力つくしのうきわざもをへてさなぶりむかへけるかな  
さなぶりといへるは早苗ひきぬきて田うへ納めし日の事ぞかし

第二十一 早苗分離祝附湯忌

いつしかにさなぶり納め田の神へ造酒を備へて祝ふうれしさ

さなぶりにもとく湯をば忌む事ぞ手足あらはば水が能きなり  
さればげに水懸草を祝ふ故湯をばもとより忌みやしつらん

第二十二 早苗分離寄果敢附郷談

さなぶりは早く歸て先づいはへ餘所の田植のよりはかをするな  
己が田のさなぶりきはめあがりには餘所助くるを寄りはかといふ

第二十三 大早苗分離

誰が里も大きなぶりの日をゑらび村一同に祝ひ來にけり  
さなぶりの祝ひはいつも五月すえ季度には越さぬためしとぞ聞く

第二十四 植 田

見渡せば都て早苗をすき間なく植おへにけり小田に大田に

第二十五 夏 田

賤の男の小田は早くもしげりそめ耘る袖のみえわかぬかな

第二十六 朝草刈初

山も里も朝の馬草のかり初は大きなぶりの日よりとぞいふ  
その日よりいづれの里も朝ごとに出でて馬草を刈る習ひなり

第二十七 田叟養行

あまたあるこやしの性の田の土にあふとあはぬをよくためせかし  
何ごえも過てはわるしことに又足らぬは作のみのりあしきぞ  
夏山の青刈敷はあらくれをかくときいれてくさらずがよし  
田の土の性を見別けよ肥は先つ過不足もなく程に入るべし  
植代の深田に草をかき込めば地底わきあひ小苗根づかず  
芝原のけづり草こそあらくれをかゝざる前に入れて置くべし  
田を植る先に散らせば荏のかすは水よどませて外に流れじ

第二十八 里郷鎌草附鋤留

里郷の田の肥には芝原を草土ともにけづりこむなり  
芝原もあらくれ前は鋤留てみだりに草をけづらせぬなり  
あらくれの時節になれば日を定め行きて芝草けづり取るべし

第二十九 山郷青刈敷附鎌留

山郷の田のこやしにはもとよりの青刈しきを用ゆるがよし  
外山なる麓のさとは鎌留てみだりに草をからせざりけり  
鎌どめの口明て後一月はあらくれ時も草を刈るなり

第三十 坎肥

風呂場尻馬屋の尻の肥穴へ草土ともにいれてくさらせ  
肥穴へけづりいれたる草の土田に施して養にせよ

第三十一 川 堀 泥土

種子池や汚水流るゝ溝のどろ砂田こやすにいとよしとしれ

第三十二 牛馬野飼時節

山郷や里郷ともに牛馬を田植過より野飼するなり

第三十三 里郷野飼附馬見

里郷の野飼の馬は芝原にはだしを打ちてはなしをくなり  
いかにせんほだしを打ちてややすれば作場へのぞむ芝原の馬  
里郷の馬をはなすも晝の内夕べになればひきかへるなり  
朝な〜野飼する頃をちこちの馬まもりつ作の用心

第三十四 山郷牧馬附野飼

山郷の牧の夏草しげるらし野飼の馬の聲ぞ聞ゆる

ひきよせてつかまぬ前は牧の馬幾日もをきて野飼するなり  
狼のあれてあだなす野牧には馬をはなつもひるの内なり

第三十五 苗 代 水

苗代の水はもとより夜深く晝のあさきをよしとするなり  
ひる水の浅き苗代日を受けてよるの深みは霜はらふなり  
苗代の早苗うごもるものなれば晝水ほして夜は掛け流せ  
泥なかに早苗うごもる苗代はたぐえし水の落ぬ故なり  
苗代の田坪がしらのぬるま水深くたぐえて置くよしもがな  
なはしろの冷る山田のこは水は溜池ほりてやはらげてよし  
針苗になる時水をよどめ置其苗代をみばしとぞいふ

第三十六 堤 水 量

田の水のをもきかるきをためすには五月の流れ計りてぞ見る

千丈の堤の封疆も蟻穴より

つゆるといふぞ氣をつけよかし

馬牽てゆきゝするには戸をとざし牧の内よりとりがすなよ

第三十七 田 水

田の水は深き淺きの中をとり絶す湛へてをくものぞかし  
水上のちかき流れは朝ひるに山田の水はゆふべかくべし  
霜の氣の見へなば田水常よりも多くなごへて置くがよきなり  
水多く湛へてをけばさらに又霜ふるとも稻はいたます  
六月の天氣の頃は田の水をたごへてほすな暫しなりとも  
山川の遠き流れは末ぬるむ里田の水はいつもかくべし  
ひでり年水よどませすかけ流せ餘りあつきは稻にさはるぞ  
雨年は絶すかくるな田の水を折ふしほして日に當てよかし

第三十八 田 水 見

水見なば其坪々をよく廻り尻土の田も残さぬがよし  
見に廻る其道筋の人の田の水ひる見なばかけてやれかし  
天地の同じめぐみをうくる田をわきの水ひと見るはひがみぞ

第三十九 水見歸利得

水を見れば草場のちかき其田坪まはりて後に馬草刈るべし  
田水見て歸りに馬草絶す刈れかりそめながら手間の得なり

第四十 稻花開落遅速不同

苗植ていつしか五十七日の  
つもればひくるはや早生の稻  
早生の花たもつよはひは七日なり  
とはねど知りて人にしらせん  
赤いねはうゑて六十五日めに  
花咲き十日たもちてぞ散る

苗うえて日數六十八日に

至れば開く金森の花

かなもりの咲きてたもつは十五日

いづれ久しき花ざかりかも

苗うえていつしか五十二日めに

はや白わせの花ぞ咲ける

しろわせは花咲はじめ其齡

八日たもちてちり終りける

鶴くびは苗うえ付てより日を重ね

五十七日めにぞ咲ける

つるくびの花のよはひは名にも似ず

七日たもちてちるがつねなり

細葉もちうえて六十三日めに

花さき十日餘り榮ゆる

ほつこくはうえて六十九日めに

花さきはじめ八日さかゆる

苗うえて日數七十三日めに

ひらきそめけり白いねの花

第四十一 濕 田 水

田のそのの濕れるならばうは水は常より多くかけて置べし  
つねよりも水かさ多くかけ置かば濕田シツタの冷へも押へ得やせん  
願はくば濕田の中に堀をあけ底の冷水ぬきてとりたし

第四十二 燥 田 水

かはき田の水は常よりそゞぎかけ多く湛へて置くがよきなり

第四十三 夜 水 引

油斷してしろひにするな田の水をひく隙なくば夜は引くべし  
あやまりて夜水を引くに人の田のあせ放ちして盗み取りすな

第四十四 耘クサキリ

田を植て二十日一日に耘れよ餘りに莠クサのしげらざる時  
元來の初草取は苗植て二十日一日が法のさだまり  
定法に草きる時は苗本のはくさもとれて稻の宜しき  
その時を後るゝならば苗もやせ草きる手間や多くいるべき  
いち番子コ先づ南北へ耘りて西より東とはかを持つなり  
身のあせて草きる袖は水波にいとぬれはて燥くまもなし  
くり返しおもへば悲しいつまでも耘りつゞく賤の緒だまき  
いな草の出來をろかなる田の草は朝露落ちて取るがよろしき  
朝露を心のまゝにふくませて耘きりぬれば穂出のよきなり

第四十五 夕涼附古歌

あひにあひて心の花もひらきけりゆふがほ棚の下のすゞみに  
くさきりの其くるしみもわすられてあかすに涼む夕顔のもと

古狂歌

ゆふがほの棚のしたなるゆふすゞみ  
夫はてゝれ婦は二布フツして

第四十六 郷談

てゝれとは男の湯帶其文字や犢の鼻の禪いんげんとぞ聞く  
本來は女の湯まき兩幅にさだまる故にふたのとは云ふ

第四十七 山田耘

いとゞだにうきくさきりや山郷はひる蚊のいでて身をせむるかな  
蚊やり火をひるもになふて蚊の多き山田の草を取るぞ苦しき  
うきわざを賤が思ひのかやり火にいづれまさと蚊やりけおれる

第四十八 蝗虫捕

苗の葉をむすび巢籠るいな虫のふえざる内に先づほごしとれ  
むれ出て苗の葉くらふ稻虫をおこたらずとれをこらざるまに



第四十九 難捕捨虫

節を通し苗の根くらふいなむしはかたちかくれて見えがたきかも  
莖と葉にひしとつきたるありくひのかたちは見へてむしはとれざり

第五十 蝗虫送

取ることのならぬたぐひの害虫を送り落さん祭りごととして  
いなくさについてあだなすいな虫を送るはいつも六月ぞかし  
作を喰ふ野鼠こそは山家にて七夜つづきて送るとぞ云ふ

第五十一 蚊如雷

かしましやいねても更に夏のよのあしの丸屋にさはぐ蚊のむれ

第五十二 蟬

秋の田の初穂のみのりまちがほに日數重ぬるせみのこゑ哉

ちからせみ鳴て三十日を積みぬればわせは早くも實るとぞきく

第五十三 稻妻附早稻子

いなづまのあるやなきやのちぎり見せ折をわすれす閃めけるかな  
いなづまのかよふとみしも程近しはやくも早稻ははらみそめり

第五十四 田埒間稗附郷談

みのらざるうちに稗の穂ぬきてとれまた來ん年の稻にさはるぞ  
田に生ゆる埒間小稗とよべる草畑に萌えて馬尻ひゑといふ

第五十五 秋田附古歌

秋の田の穂なみをわたる風までもゆたかなる世のこゑに吹く哉

古歌 うちなびく田の面のほなみほのくと

露ふきたてゝわたる秋風

第五十六 稻 異 名

いつしかとみのり宜しきみふし草世は秋よりぞゆたか増ける  
みのりしも水かけ草の名にしるきいせきの流れ絶すたゞへて  
ゆたかなる御代のためしにあひにあふ秋待草の八重穂さかえて  
いづかたも秋のみのりをいそぐらむ山田もけふばかりしほに見ゆ

第五十七 早稻 附 穂 懸

きのふまで青葉ゆらぎし稲もはや實りにけりな小田の早いね  
吉日をゑらみていつも人毎にわせの初穂を刈りそむるなり

第五十八 案山子 附 古 歌

深山田の實る頃にはしゝとさるをどす爲にもかゞし立てなん  
何人のとなへ置きけむ山田もる僧都は鹿のをちる坊主と  
古 歌 山田もる僧都の身こそ悲しけれ

秋はてぬれば訪ふ人もなし

第五十九 鳴 子

むら鳥を威す爲なり田や畑の實ると見なば鳴子さげをけ  
風すさむ鳴子の音に驚きて畑や田にちるむらすぐめかな

第六十 稻 守

稲まもるかりやの苦をもる露に賤が手土裸の袖はぬれけり

第六十一 稻 稔

植わたす小田のさなへにふしたちて實りし頃を稻といひけり

第六十二 稻刈 時 附 刈 行

わせは前もちは後に七月の末より彼岸までに刈るなり  
八月の末より九日終るまでいつもおくての刈時としれ

なが雨のふるか若しくは川をしのごみ稲ならば穂くびりて刈れ  
ほし返しならぬ深田の稲かりは二手うちにし八把つかねよ  
しがれ刈早きにまさる何稲も青米ならで石の多かり  
もとよりの深卑泥田の稲ならば水をかけ置き刈て取れかし

第六十三 稻 刈

まちにまちし秋は来りてけさはや田の面刈る見ゆしづのひとむれ

第六十四 穂末田刈

ひるまには主の勤のしげき故已がほまちは夜田に刈るなり  
さやけしな今宵の月の晴るゝ夜にいざ我がほまち行てかりなん  
ほまち刈田の面の穂なみゆらくと月いづる頃のかげのさやけさ

第六十五 月前田刈

二夜出て小田刈る袖に光り添ゆ月もあはれを知り顔にして

第六十六 刈 稻 立 様

かりいねを五把つゝ立てて其上の笠には一把かぶせ置なり  
ほすためにひるははづしてかさ稲を夜はかけ置け雨の用心

第六十七 稻乾附郷談

日和見て朝ほしちらす其稲も日のかたむかば穂入れをぞする  
朝干して夕べにいねをとりあつめ田につみ置を穂入れとぞいふ  
世の傳へ夜の中に七度秋の空替るといふぞ油断はしすな  
干し流し其夜の雨にあふいねの後の始末は倍の損なり  
三把づゝ六ちがひかさねつむいねや之を三束穂似宇とはいふ  
刈とりてたばねすひろげ其儘に日あつるいねを布干といふ

第六十八 稻 揚

田の面より干しいねあげてつみ（ち） いねは家へいるべし（此歌缺字ありて意味不詳）

第六十九 稻束連

ほしいねをそくつるならば把つらのむすびめ中に込てゆはせよ  
千ちらす小把の稻をとり揃へ六把つかねしを束つるといふ

第七十 馬荷繰

幾たびかまにくり返しはこびけむ小田には稻の残りなきまで  
なるゝまでくるしかりけんおさな子の幾まにくりや賤のをたまき

第七十一 落穂拾

いな場より落穂をひろひ歸るとも下穂へ残せ腐れけるゆえ

第七十二 稻似字積所

いなにうは居家をはなれてつむがよし壘地なりせばしかたなければど  
いつとも居屋のつゞきに稻似字を火事用心のために積まざれ

稻郷のにうにかぶせるくびりわら何方にても母乳といひけり

第七十三 稻扱附郷談(五首)

粃(一首)

米(一首)

粃(一首)

郷談(一首)

以上の五首は虫喰甚だしく遺憾ながら掲載するを得ず。

第七十四 肥過田位

村尻の汚水のかゝるこゑ過田上土にても下位にをちけり

第七十五 卑泥田

水と泥常にひとしきひどろ田も上土なれば上位とぞなる

第七十六 土位

上中下三つに定まるつち三位裏は三々の九位に別れて

第七十七 田附疇名下地名

水田とかきたるもじをたとぞよむ陸田のこえは畑(譯)と響けり  
田とかきてたとはよめども其田字ははたと水田の惣名なるかも  
田と畑に附けて呼けるかり名をばいづれの里もあざなとぞいふ  
土地によりくだす名なればむかしよりあざなと稱ふこともありけり

第七十八 水田陸田位、附郷談

壤イリマシり緩くこえたるさまの土田畑のくらゐ上の上なり  
黒まつちつしみ黒して細かなる田畑の位上の中也  
黒土のうちに黄色のこもれるをツシムクワ薫とは稱へけるなり  
薄しろくやはらかりけるくろま土田畑の位上の下ぞかし  
白壤ツチに野土まじれる野ま土の田畑のくらゐ中の中なり  
色黒く徒土ツチに似たるすまつちの田畑のくらゐ中の下ぞかし

うごもりて色薄白スナき砂土の田畑の位下の上としれ

第七十九 燥カサ 田

水かれてふる雨待ちし燥田を  
天水田とも稱へけるなり

第八十 村 尻 田

にこり江の常にかゝれる村尻の  
田はこえ過て出穂を忘るゝ

會津歌農書 中之本 目次

畑 部

第一	雜穀蒔時附古歌	(三三)
第二	准 <sub>ニ</sub> 草木花 <sub>一</sub> 雜穀蒔時	(三三)
第三	青引大豆蒔時	(三四)
第四	荏 <sub>ニ</sub> 苗植時 <sub>一</sub> 附鄉談	(三四)
第五	畑作 <sub>ヲ</sub> 重播 <sub>ル</sub> 種子 <sub>ノ</sub> 附鄉談	(三五)
第六	種子 <sub>ノ</sub> 拳	(三五)
第七	山畑種子 <sub>ノ</sub> 拳	(三五)
第八	麥蒔初	(三六)
第九	紅花蒔祝附鄉談	(三六)
第十	棹 <sub>ヲ</sub> 立 <sub>テ</sub> 大豆 <sub>ノ</sub> 附鄉談古歌	(三六)
第十一	雜穀刈時附引時	(三七)

第十二 麥トウモロコシ拔附鄉談……………(三六)

第十三 穀物輕重計……………(三八)

第十四 古胡麻カゴヒ團……………(四〇)

第十五 古白芥子ツツジ團……………(四〇)

第十六 茄子定法……………(四〇)

第十七 蔓依ニ卷樣ニ知ニ陰陽……………(四一)

第十八 右卷蔓……………(四一)

第十九 左卷蔓……………(四一)

第二十 左右卷蔓……………(四一)

第二十一 畠莠取附行……………(四二)

第二十二 畑作肥コニヤシ養行附鄉談……………(四二)

第二十三 肥取始末……………(四三)

第二十四 畑作疎拔……………(四四)

第二十五 厚種子好畑作……………(四五)

第二十六 薄種子好畑作……………(四五)

第二十七 畑種子性……………(四五)

第二十八 麻アサ量……………(四六)

第二十九 麻引時附鄉談……………(四六)

第三十 麻アサ剝行……………(四六)

第三十一 畑畦陰陽附行……………(四七)

第三十二 諸花依ニ時節ニ實生稱……………(四七)

第三十三 諸作花開時附行……………(四七)

第三十四 諸作花開落遲速不同……………(四八)

第三十五 作毛把束附鄉談……………(四八)

第三十六 作根莖實……………(四八)

第三十七 產業……………(四九)

第三十八 畑ヒ彥ヒ畦……………(四九)

第三十九 畑作虫拾拾……………(四九)

第四十 大豆引行附打行……………(四九)

第四十一 畑輪作……………(五〇)

第四十二 西瓜作初……………(五〇)

第四十三 西瓜畑迹作……………(五〇)

第四十四 不限畑作……………(一五〇)

第四十五 害獸防除……………(一五〇)

第四十六 粟 種……………(一五一)

第四十七 所不合粟草……………(一五二)

第四十八 蒔付(實蒔)惡種子……………(一五二)

第四十九 芋カズ作行附刈時……………(一五二)

第五十 蕎麥實生時節附郷談……………(一五三)

第五十一 蕎麥打行……………(一五三)

第五十二 菜 摘……………(一五三)

第五十三 諸菜生置行……………(一五四)

第五十四 種子蕪大根植……………(一五四)

第五十五 畑物仕舞……………(一五五)

第五十六 惣作取收……………(一五五)

# 會津歌農書 中之本

## 第一 雜穀蒔時附古歌

さと郷のそばをまくには六月の土用の終二十日前なり  
 山郷のそば蒔時は初土用中の土用と二度を用ゆる  
 嶽下や陰氣の里のそばまきは夏土用入る三日前也  
 そばの種子蒔て實のいる日つもりは八十日とこそはききつれ  
 たね蒔て八十日にみるるそば折々霜にをそはれもする  
 ひるのたねまくは四月の半頃苗にそだて、植たるがよし  
 在の種子は四月半を本として五日の内にまきたるがよし  
 三月の中にかゝりてけしをまく其前もよし霜はさはらじ  
 つぶからし彌生半にまくがよし少しばかりは遅速さはらじ  
 山郷は雪消ゆる日の遅きゆえ春のたね物はやめにぞまく



大むぎは秋のひがんの内にまけ早く蒔かでは實のほそるべき  
 雨降に蒔たる麥はいつとも黒べに成ぞ晴の日にまけ  
 おのづから朽ては黒く成麥穂之を青奴クロボと語り傳へき  
 小麥をば秋のひがんの前にまけ遅きはそだちあしとこそきけ  
 小豆たね四月の中にかけてまけ山家の畑は半過にも  
 さゞげ種子四月半にかけてまけ霜よけすれば其前もよし  
 きびのたね四月の節の後にまけあまり早くば鳥のあさらんり  
 大方の粟の蒔どき四月中所によりて遅速あれども  
 粟こそは不作も知らず色品の數ある種子を取ませてまけ  
 あはのたね五十餘品の其中の所や時にあふをよくしれ  
 山をろし常にあてぬる畑には晩粟作れ霜はさはらじ  
 軒の下すえ木の枝に粟種子を釣しておけよけむり忌むため  
 粟たねにけむりあてなば生えて後犬尻草に替るとぞ聞く  
 時ちがひあらし作りしその粟は犬尻草に成ときゞけり

古歌に

山ばたにつくりあらせし犬尻草

あはのなるとは誰がいふらむ

もとよりの胡麻の蒔どき人とはば四月の中がよしと答へん  
 其時節おくれて種子をまくなれば糝コの多く石コぞ少なき  
 早まめを蒔くには四月中の前餘り早きは霜のいぶせき  
 胡麻の種子雨ふる時にまきぬれば掛土しまり生へよどむなり  
 いにしへの大豆の蒔時マキトキ五月中今はいそぎて四月半に  
 五月なる半夏に入らば大豆まけいそぐ諸手の仕事やめても  
 年毎に大豆まき鳥やさしくも蒔時に來て人におしへき  
 垣さゞげ四月の節の始より中のあいだにたねまくがよし  
 あつき湯をかけてさゞげの種子まけばありくひつかでよしと稱へり  
 いつとも遅くまきたる垣さゞげ實生りすくなきものところきけ  
 草麻は春のひがんに種子ふせて四月中より植立ててよし  
 蜀黍のたねは四月の節よりも中の間に蒔たるがよし

第二 准草木花 雜穀蒔時

さげ種子蒔くは一重の山ぶきの花咲く頃がよしとこそ聞け  
かきつばた花のひらかばまめをまく時節来ると心得てよし  
糸萩の花もそろ／＼散ると見ば小麥の種子をまけよ必ず  
早大豆種子をまくには庭に咲くぼたんの花ぞしるべなりける  
黍をまく日のさだまりはなしの花ひらける時節見合せてせよ  
藤の花開けるときに胡麻をまけ實のり宜しきものとき／＼けり  
牽牛花のひらきはじめは里郷のそばまくときとかねて聞きけり

第三 青引大豆蒔時

春引の大豆は百五の霜明の五日も前にまくが能きなり

第四 荏苗植時附郷談

荏苗こそ五月半夏の頃よりも七夕のころにいつも植けり  
遅植も早まきも同じ荏苗かなみのりし後に刈るはひと鎌  
實り際わせおくもなし荏の作り一度に刈るをひと鎌といふ

第五 畑作重播種子 附郷談

何種子もしきまきすれば其畑の先跡共に作りあしきぞ  
種子薄くむら生へしたる作中へ重て播くをしきまきといふ

第六 種子 拳

教へにも成りがたかりしたなぶしぞたび／＼まきて知れやそのわざ  
たなぶしになれける人に聞くがよしすべをならふにはづるものは  
心得て厚まきにせよ新たねは古たねよりも性のをとるぞ  
作種子をこぶしの内へにぎりこみ蒔きけるわざをたなぶしと云ふ

第七 山畑種子 拳

山郷は都て作りのはえ薄し里郷よりも厚まきにせよ

第八 麥 蒔 初

麥種子は先づ丑の日にまきそめよもとより用ひ來る吉日キナニチ  
丑の日を麥蒔初ツクに用ゆるは牽牛星を祝ふなりけり

第九 紅花蒔祝附郷談

折もきて花まくならば其時に先づ快くいはひ事せよ  
くれないの種子をろす日のいはひごと花のかまぬ作祭りなり  
紅花の種子まく人に一禮をするにもたかく腰をかぐめて  
種子まきに腰をかぐめて禮すれば花かぐむとて忌む事ならひなり

第十 棹立大豆附郷談 古歌

陽の氣をすくなくうけておとろへし日陰の豆は棹立ササダテにぞなる  
枝もなくたけにそだちて實もならぬ豆の作りをさだちとはいふ  
古狂歌 あはれなりわれは日かげのさだちまめみなりなければ引くひともなし  
みなりなきさだちのまめはあはれなり道のゆききにひく人もなし

第十一 雜穀刈時附引時

早大豆コメソウは七月の中におくまめは九月節より後に引くなり  
六月の土用のうちにひきてほす青引豆は馬の飼草  
九月中其うしろまへさと郷のそば刈る時と心得よかし  
山郷の陰氣の深き所こそ八月節にそばを刈るなれ  
粟稗は八月過にこそ刈れと古の人とはなへ來にけり  
六月の節にもなればいづかたのけしのみりて刈るものぞかし  
わせ粟は八月節の少し前おくは九月の半ばにぞ刈る  
つぶからし早まきしける甲斐ありて六月の節にはや刈にけり  
わせ麥は五月のせつの四五日目おくては半夏前に刈るなり  
いつも又八月節のうしろ前胡麻はかね付け刈りて取るなり  
小豆をば七月中と八月の節のあひまにひきて取るなり  
油荏は九月の節と中のあひ實りきはまに刈てとるなり  
小豆をば七月中と八月の節のあひまにひきて取るなり

さゞげまゆわせもおくてももろともに七月中にひきて取るなり  
きびの穂は七月中と八月の節の間にこそ切りてとるなれ

### 第十二 麥<sup>ムギ</sup> 扱<sup>コボ</sup> 附郷談

七月の七日をこすな小麥こそ六月中に扱ぎてしまへよ  
初秋の七日過てもこがざらば小麥は化けて小蝶とぞなる  
六月にこがずにおきし小麥化け蝶となりしをほりと稱へり  
わけしらぬ人こそあはれこがで置く小麥のすたれよそに見ながら  
大麥も當座に扱げよおくれなばこれまたほりとなるものぞかし

### 第十三 穀物輕重計

米の重さためて見れば壹升は凡そ三百八十目  
一升の粃のをもさはいかほどとへば三百二十目とぞいふ  
穀麥を秤にかけて一舛は之も三百二十目とぞいふ  
春麥をはかりてみれば一升の重さ三百五十五目

一舛の小麥を問へばその數へ重さ三百九十目といふ  
つぶがらしためてみれば一升の重さ三百二十五目  
春きあはを一升はかりその重さおよそ三百九十目  
刈り粟をためてみれば一升の重さ三百二十五目  
一升のまめのをもさを尋ねれば三百九十五目といふ  
一升のささげの重さいかほどとためて見れば四百五目  
からきびを一升はかり其重さ三百十五目とぞいふ  
一升の胡麻はと問へばその重さ三百十五目とぞいふ  
一升の重さは二百八十目げにこまかなり誰がためしぞ（此歌穀物の名稱を示さず意義不明）  
穀物のたぐひを越して重き小豆目方四百二十目なり  
一升のそばの重さはいかほどと問へば三百二十目といふ  
からびゑを一升はかり溜め置きてはかりてみれば二百二十目  
一升をためてみれば油荏の重さは二百二十五目  
菜の種子を秤にかけて一升の重さ三百四十目と知れ  
大根の種子一升の重さをば三百六十目とぞはかりし

第十四 古胡麻園

八九年かこひ置たるふる胡麻も油のたりはかはる事なし  
雨年はみのらもぬのぞ其ために古のごままでもかこひ置べし  
旱年ごまはかこひをくにも氣をつけよ餘り古きは心許なし

第十五 古白芥子園

幾とせも圍てよきぞつぶからし古きは猶もからみ増なり  
不作する年の爲にも古芥子かこひおけかし少しなりとも

第十六 茄子定法

いつとても四月のうちに茄子苗を畑に植るは法のさだまり  
四月中法に植ける茄子苗は百五の霜を避くる爲なり  
茄子苗を植て三十五日めに花のひらくは法のさだまり  
花ひらき八日もたもちて散るぞかし茄子生るはまた落ちて八日目

苗植て茄子とるまでの日つもりは五十一日法のさだまり  
山郷の手入つくさぬ茄子苗は五月の中に植置きてよし

第十七 蔓依卷様知陰陽

右へまくつるのたぐひはいん草ぞ左まきこそ都て陽草  
手をのべて左右をめぐりまきつるは陰陽ふくむ類ひとぞ知る

第十八 右卷蔓

手をのべてをのれを右へまくつるは庭のさげや山のいもなり

第十九 左卷蔓

こはいかに左へまくは忍冬藤そしてところもおなじころに

第二十 左右卷蔓

ひとかたにおもひさだめぬ心にや冬瓜ひさは左右まきなり

第二十一 畠莠取附行

畑の草早くとれかしおくれなば手間入増して作り糞れん  
ひでりには朝夕はらへ畑の草日のうちとるな作りいたむぞ  
おそくとる實りの畑の草ならばはきため穴へはこび入るべし  
實のなりし草を畑にをくならば其翌年やおもひやらるる  
胡麻の草とる折あしく雨ふらば泥のかゝりて枯れ失せやせん  
日でも雨つゞく日も畑の草取らずに置くな油断はしすな  
三たびとる數をばかくな畑の草もしをこたらば作はみのらじ  
畑の草まづ三たびぞと心得よしげらば又もをぎなふて取れ

第二十二 畑作肥養行附郷談

畑肥の色品多き其中に勝れてよきは屎尿なりけり  
諸作りをやしなひて見よ先づ屎尿その潤ひは格別ぞかし  
糞に水ひとしくいれてゆるめしをだらごえとこそはいふなり

作の葉の上よりかくる糞水を葉ごえとこそは稱へけるなれ  
作の根に廻しかけをく養ひは車こやしとこそはいふなれ  
諸作りの本へかけおく養ひを何方にても根ごえとぞいふ  
作によりたね覆をして其上へ掛くる養ひ葉肥とぞ云ふ  
畑の種子糞にかきませ蒔きけるをくるみ肥とは稱へけるなり  
茄子畑は植ざる前に糞をせよ追ひやしなひのかたき作りぞ  
青すゝきもしたる灰を山郷は焼灰といひ肥にぞする  
その土のやはらか過る畑ならば眞木灰かけよしまるものなり  
さと郷のしまれる畑に葉の肥かけなば頓てやはらぐぞかし  
畑溝へ青草刈てちりしくを刈込肥となへけるなり  
粟まくにかたき眞土の畑ならばやき灰かけよ頓て柔らぐ  
焼酎の粕は細かにもみくだけ畑のこやしに能くきくぞかし  
古家をこぼち取たる煤かやは作のやしなひ取わけてよし  
川藻刈り干して置きつるやしなひは畑作によし施して見よ  
何鳥の糞もこやしに成ぞかし木のしたさらべとまりからすの

前マ廉レにこやしシ施セ畑ハ々々は當座トとしてこやすには増す  
色品シキの肥コのをこりを尋ぬるに地より生れる然はあらしな  
其土を養ひぬれば諸作モロサクはよくうるほひて實り助くる

第二十三 肥取始末

諸作のうるほふもとの色品の肥の始末をせよや地作り  
始末するこやしに手あしけがすとも心はいよよ清くもたなん  
手とあしを洗へば糞は落ちぬれどすぐになほらぬ汚れごころは

第二十四 畑作疎拔

何作もちいさき時に怠るな厭かす心にかけて疎オホ拔キけ  
時をくれ大きく成ておろぬけば後の實りの障りとぞなる  
諸作りのたけを見合せ幾度もおろぬきとりてそだち促せ  
まひるには作りいたむぞ同じくは朝な夕なにまびきをろぬけ  
大こんはあまりまばらに疎拔な過ては作の益ぞ少なき

伏せおきし萬の苗を見合て成程薄くおろぬくがよし

第二十五 厚種子好畑作

大角豆たね厚くまけかし稱へにも手をくみあはせ實るとぞいふ  
紅花のたねは殊更厚くまけ枝のしげるはあしきとぞいふ  
くれないの下枝をくれて咲花は實りの薄きものところ知れ  
胡麻の種子常より厚く蒔がよし薄播すれば枝さくものぞ  
枝ごまはそだちのをそくみいるともうれをくれしてよはたねとなる

第二十六 薄種子好畑作

大麥と小麥の種子は薄くまけ厚く蒔きては小穂コホに實らん  
厚く蒔き間引するとも麥類はをろぬく事のならぬものなり

第二十七 畑種子性

その種子を糞コにくるみて清水いれ蒔もあるぞよ性オホをよくしれ

第二十八 麻アサ 量バク

麻アサをまくはたけにたつる麻アサばかりは細きすはへかすくろがやよし（此歌意味不詳——校訂者）

第二十九 麻引時附郷談

七月の中より三日前に麻アサそぎりととなへ引はじめけり  
七月の中より後に引麻は末なるゆえによて伐といふ  
時過て花散る比に引麻ををばな伐とはいひならしけり

第三十 麻アサ 剝ハキ 行ウチ

麻剝アサハキがば先一日も日に當てて一夜は水にもとをひたせよ  
根を一夜水につけたる麻をまた本末共にひたしおくなり  
ひたしぬる麻の本末よきほどにうるほへる頃あげて剝ハキぐべし  
麻アサひたす水の加減の日づもりも馴れねば知らじ功をつめかし

第三十一 畑畦陰陽附行

東西へ立てたる畑の畦腰は南の方を陽とするなり  
南北へ立たる畑のうねごしは東にむかふ方が陽なり  
麥作や紅花などのまきかたはかならず畦の陽が能なり  
春雪のはやく消えたる陽の方はいづれと氣をばつけて置けかし  
畑畦に立てし柱に朝日さしとくるは陽の方よりぞかし

第三十二 諸花開依シ時節トキノセ實生シナヒナ稱

やみの夜に花咲く年の草と木は都てみのりのよしと傳へき  
月の夜にあたりて花の咲年は草木みなりのあしきぞいふ  
諸作モトナの實ミの生るわけのよしあしは草木と同じ心なりけり

第三十三 諸作花開時節附行

里人は心して見よ諸作のやみにあたりて花咲くさまを



草木の花はのべつめかたけれど諸作の花に行ぞありける(此歌意味不詳——校訂者)  
何作も植付けしより定りて花のさくべき日並あるなり

第三十四 諸作花開落遅速不同

時來り菜たねの花は三月の  
なかばすぎにぞひらきそめけり  
むかしよりなたねの花の咲ちりは  
三十日の内とこそきけ  
なの花と大こん花は朝ひらき  
二日たもちて散り終るなり  
早麥は四月の節の六日ごろ  
花ほころびて七日さかゆる  
おく麥は四月の中の五日ごろ  
花さきそめて七日たもちぬ  
里前の種子大こんの花はまた

四月はじめにひらき初けり  
花みえて種子大こんの咲きちりは  
いつも三十日餘りとぞ聞く  
いつにても江戸大こんの種子花は  
五月の節に入て咲くなり  
咲ちれる江戸大根の種子花の  
そのもよほしは五六十日  
びともじはこそぞの五月に植つけて  
今年四月のなかば咲なり  
あさづきは四月の末に咲そめて  
花をたもつは九日ぞかし  
早小麥四月の中の七日ごろ  
花さきそめて六日さかゆる  
おく小麥四月の末に咲そめて  
花のさかりは六日なりけり

白芥子ヲカサレたねをおろして五十一日と  
いふより花のひもほどきけり  
咲そめて散り終るまでかぞふれば  
からしの花は二十日餘ぞかし  
にんじんは五月の節の八日ごろ  
花咲くひまは十日餘りぞ  
にんじんの下枝をくれの花見れば  
三十日をこえてさくなり  
きうりだね植て六十一日の  
日數つもれば花ひらくなり  
咲き初めてさかり久しき胡瓜哉  
末ばなまでは四十日なり  
漬瓜やきうりうみ瓜花ひらき  
三日たもちてしばみけるかな  
はやちさの花は五月のなかばごろ

みえそめ日數十五日さく  
辰に咲き己の時しぼる何ちさも  
みるほどはなき花盛かな  
おくちさの花は六月十日ごろ  
見え初二九の日數さくなり  
けしの花たねまき五十七日に  
いたるあひだにひらき初けり  
けしの花盛りはしばし一二日  
朝ごとさくは五日なれども  
瓜たねはうえて七十二日めに  
花見えそめて四十日さく  
種子植てをよそ七十四日めに  
ほのくさける夕顔の花  
そのさかり四十日とはきつれど  
見るにすくなき花の夕がほ

ゆふべ咲朝にはしばむ夕顔の

花のさかりは一夜のみにて

紅花は五月の末にさきそめて

六月なかば摘み終るなり

出でて今つまんもおしきくれないの

色も妙なる花さかりかな

種子をまき日數八十<sup>ヤッヂ</sup>字に花さきて

十日餘たもつ雪のしたまめ

はやまめはまきて六十三日目に

花咲きそめて十日たもちぬ

なかにまめまきて六十六日の

日數をふれば花咲にけり

花さかり誰が蒔にけんさりとても

なかくの豆の二五十日とは

おくまめはまきて六十三日目に

咲そめ花のさかり九日

六月の節の三日の種子牛蒡

花見えそめて十五日さく

唐さゝげたねまき五十二日目に

花ほころびて二十日さくなり

山階のさゝげの花は種子まきて

六十八日目にぞさきける

いつ見てもさかり久しき山階の

さゝげの花は二十日咲なり

垣さゝげまきて七十四日目に

花見え二十五日さきけり

朝ひらき夕をまたぬさゝげ類

半日たもちて落る花ふさ

唐がらし植て三十五日目に

花のみえそめ四十日さく

唐がらしくきの末より咲そめて  
花をたもつは三四日なり

西瓜種子おろして六十二日目に

花見へそめて二十日餘りさく

朝咲て日の中しほむ西瓜の

夕べをまたぬ花のはかなさ

種子をろし百日過て冬瓜の

花はひらくとかねて聞けり

冬瓜の花の咲ちるもよふしは

いつも三十五日なりけり

朝ひらきゆふべにしほむかもうりの

花のよはひは幾ほどもなし

あづきたねまきて六十三日目に

はなほころびて二十日さくなり

あづき花莖のもとより咲初て

たもつよはひは三四日なり

胡麻まきて花咲く頃をきぬれば

五十七日めとぞいひける

ごまの花ひるは見ゆれど

朝ごとに咲きて夕べに散り終りける

きびまきて凡そ七十五日目に

いたれば花も開きけるなり

きびの花咲て保つは九日と

誰がためしけむ事のかしこき

いづかたもたばこの花は苗植て

四十七日目にぞ咲ける

誰がためすたばこの花のみへ初て

さきつ散りつゝ十五日とは

朝まだきひるになりてもたばこ花

ひらきつゞけつ三日たもちぬ

中手粟まきて八十二日目に

花咲そめて八日さかえぬ

おくあはをまきて其あひ數ふれば

花さくまでに九十一日

咲しよりよはひを見るにおく粟の

花のさかりは七日ほどなり

ひゑたねをまきて九十三日目に

はなさきよはひ十日たもちぬ

もろこしの花さく頃は苗うゑて

五十八日目とぞいひける

もろこしの花の盛りを人とはゞ

九日たもち散るとこたへよ

たりきびはうえて六十八日に

及びぬるころ花を咲くなり

玉蜀黍のはなのさかりは咲初て

九日たもち散り終るとぞ

七月のなかばといへど麻の花

わせおくとともに開き初けり

七月の中よりつゞき九月まで

木綿の花は咲きて見えけり

長き葉のあいの花さく其つもり

うえて七十二日目とぞ知られし

苗植て凡そ七十五日目に

丸葉の藍の花は咲きけり

ながき葉や丸はの藍ももろともに

花の咲き散り四十日なり

蕎麥の花ひらく時節は種子蒔て

五十九日のところと知られし

そばの花咲きて散りつる日積りは

いづれの里も四十日なり

まきつるも苗うえつるも荏の花は

八月節にひらくなりけり

第三十五 作毛把束附郷談

三手うちに対てたばぬる其稻をいづれの里も一把とぞいふ  
 ひと手とは稻ひとつかみ刈とりて三つかみ把を三手うちといふ  
 三手うちにたばね置たる其稻を六把つかねて一束といふ  
 稻たばの位に刈りし其蕎麥を七把つかねて一束といふ  
 いなたばの位に刈りし麥や稗六把つかねて一束と云ふ  
 稻たばの位に刈りし荏と胡麻は六把揃へて一立といふ  
 本口のわたし一尺二寸九厘カマツの束とこれを云ふなり  
 穂くびりに刈たる粟の三十を山家の里は一束といふ  
 ほし蘭草たばぬる時に三六寸まはりにするを一把とぞ云ふ

第三十六 作根莖實

ねとくきと實を用ゆるの外はなし幾作有も三つにわかれて

第三十七 産業

こゝかしこ農のしはぎをなしをへて庭のあひまや空地アキ作らん

第三十八 畑彦畦

ゑださしてつるの子までに五畦を用ひてこれを彦と呼びけり(此の歌の意味不詳——校訂者)

第三十九 畑作虫拾捨

をこたらず心にかけて作の虫あさごとひごととり捨てよかし  
 生たちの秀てたりともをこたりて虫を取らずは作りあれなん

第四十 大豆引行附打行

雨ふりに引たるまめはほして積みしめらば朽ちん似字の内にて  
 日和見て大豆は打ちて取るものぞいそがしからぬるわざをやめても

第四十一 畑 輪 作

おなじ作かへして作りその實りあしきたぐひは地を替へよかし  
去年に茄子植たる畑へ今年又作るたぐひを返しとはいふ

第四十二 西 瓜 作 初

西瓜の作りはじめは元祿の年のはじめのころよりぞかし  
西瓜種子蒔くべきころは熟瓜うりづかをうえつけ終る頃とこそ知れ

第四十三 西 瓜 畑 迹 作

去年西瓜作りし畑へ茄子苗を今年植なば立枯れやせん

第四十四 不 限 畑 作

宜しとてそれにかきるな畑作り何のあたるも年によりけり

第四十五 害 獸 防 除

山畑へほぐしたてをけよなごとに

作りをあらす敵に備へて

日のくれて火なはやかごを竿にさげ

畑にたつるをほぐしとぞいふ

遠山の畑のかこひシシガキに鹿垣を

ゆひ廻しをけ敵ふせぐ爲め

日暮れなばからつゝはなせ鐵炮の

音におそれ鹿は逃げなん

第四十六 粟 種

あは草はわせおくなかて糲共こに五十品ほど有る事ぞかし

その里の土地に叶へる粟草をえらびて作れもろしなのうち

あは草によりて不作の年もあり一色作りするなあやうし

田方なき山郷にてはひとすじにあはを作りて夫食とぞする

第四十七 所 不 合 粟 草

秋早く寒さの來る嶽下タケノコにおく粟草はあはぬ作りぞ  
嶽下の寒きところへおく粟を作れば秋の早霜にあふ

第四十八 蒔付(實蒔)惡種子

藍たばこ南ばん辛子此三つはたかくもならぬ蒔付の種子  
在と稗と茄子ひともじの類をば種子蒔付ることのあしきぞ  
里により蒔付けにする在と稗はみのりあしくて石イシの少なき

第四十九 芋カウヤムシ作行 附刈時

初ばえのからむし刈りてほしちらしあくたをかけて焼くものぞかし  
からむしを刈て焼たる其畑は成程薄くけづり立つべし  
初生を焼たる跡のからむしはむらなく長くそろひこそすれ  
からむしは夏の土用の内に刈二番ほき刈れ八月の中  
からむしは刈て其まゝ水にいれ剝引共に一度にぞする

第五十 蕎麥實生時節附郷談

さとさとのおそく蒔たるそばの實は秋の彼岸にくしを立てけり  
嶽下のはやく蒔たる蕎麥は又八月中にくしをたてけり  
いつまかどそばの型のあらはれてみかたとに成をくし立といふ(此歌の意味不詳——校訂者)

第五十一 蕎麥 打行

ひるの隙ひまなくば夜でもそばを打て人手廻しの爲なるぞかし  
打後れ雪いたゞける蕎麥打たばらちあかずして手間かゝりなん

第五十二 菜

摘

葉の枯れぬ時にあみな程を見て冬のかてなにつみけるがよし  
ふらず共雪のかゝりに心がけあみなを先につみて取れかし  
つみ後れあみなに雪のかゝりなば常よりかさのをとりこそすれ  
大根はあとへ廻して引くがよし摘とる間にも育つものなり  
牛蒡をば掘取る時に先ちて上に覆かけ日をさけよかし



第五十三 諸菜生置行

寒の内こほらぬやうに里芋は爐邊へ穴をほりて生くべし  
人ごとに術をこらして生けぬれどくされ易きは芋の種子なり  
ほり取し牛蒡を穴に生けんには水くみかけてしめし置けかし  
温好く作りと思ひ必ずや川へ入るゝな牛蒡わるゝぞ  
つむかぶらとりあげて後雨風にさらして生けよくさらぬぞかし  
生け穴のかけ土うすく水入らばかぶらくさらん油断はしすな  
大根は横に生くるも立てぬるも穴のかけ土厚きほどよし  
穴に生けくさらぬものはつくねいも土の薄かけさしてさはらず

第五十四 種子蕪大根植

冬立ちて半になれば種子かぶら大根ともに植ぬるがよし  
雪早くふる山さとは種子蕪大根共にいそぎ植べし

第五十五 畑物仕舞

雪みぞれふらざる前に畑もの仕舞て安き晩秋の空

第五十六 惣作取收

空高く田畑の作りとり收め心にかゝるくもりだになし

會津歌農書 下之本 目次

雜部

第一 農業油斷……………(二六五)

第二 農業後悔……………(二六六)

第三 危農務……………(二六六)

第四 愚農夫……………(二六六)

第五 農人奢……………(二六六)

第六 欺……………(二六七)

第七 道畝分離……………(二六七)

第八 田地界論……………(二六八)

第九 田水盜……………(二六八)

第十 田水論……………(二六八)

第十一 田家構附春場……………(二六九)

會津歌農書 下之本

第十二 山郷家構……………(一六八)

第十三 厩……………(一六九)

第十四 厠……………(一七〇)

第十五 園堀草……………(一七〇)

第十六 居木……………(一七〇)

第十七 瀾シヤ水……………(一七一)

第十八 汚水溜桶沉所……………(一七一)

第十九 塵穴……………(一七一)

第二十 灰捨場……………(一七一)

第二十一 肥器……………(一七二)

第二十二 農人思惟……………(一七二)

第二十三 農人同志……………(一七二)

第二十四 冬田作……………(一七三)

第二十五 二代農人盛衰……………(一七三)

第二十六 田畑疇園……………(一七三)

第二十七 田畑利得……………(一七三)

第二十八 作喰虫禽獸……………(一七四)

第二十九 天道……………(一七六)

第三十 地利……………(一七七)

第三十一 人事……………(一七七)

第三十二 氣候不正……………(一七七)

第三十三 氣候順正……………(一七七)

第三十四 三月末霜……………(一七八)

第三十五 四月之中霜……………(一七八)

第三十六 五月の節霜……………(一七八)

第三十七 九月の節霜……………(一七八)

第三十八 九月の中霜……………(一七八)

第三十九 十月の始霜……………(一七八)

第四十 四時霜間……………(一七九)

第四十一 東作業……………(一七九)

第四十二 畝使陰陽……………(一八〇)

第四十三 農事圃業三數……………(一八〇)

第四十四 農家本末……………(二六二)

第四十五 農事先後……………(二六二)

第四十六 牛耕……………(二六二)

第四十七 馬耕……………(二六三)

第四十八 堯舜懷慕……………(二六三)

第四十九 猪之耕……………(二六四)

第五十 火耕……………(二六四)

第五十一 立春……………(二六四)

第五十二 早春……………(二六五)

第五十三 二月餘寒……………(二六五)

第五十四 冰解田面……………(二六五)

第五十五 雪消圃面……………(二六五)

第五十六 三月盡衣……………(二六六)

第五十七 更衣……………(二六六)

第五十八 四月盡……………(二六六)

第五十九 五月盡……………(二六六)

第六十 六月土用……………(二六六)

第六十一 七月……………(二六六)

第六十二 八月不時霰……………(二六七)

第六十三 秋彼岸……………(二六七)

第六十四 九月盡……………(二六七)

第六十五 十月……………(二六七)

第六十六 閏月……………(二六七)

第六十七 五月雨……………(二六八)

第六十八 雨露潤諸作……………(二六八)

第六十九 秋急雨……………(二六八)

第七十 彌時雨……………(二六九)

第七十一 霖雨……………(二六九)

第七十二 雨霽祈附古歌……………(二六九)

第七十三 難降雨……………(二七〇)

第七十四 早魃……………(二七〇)

第七十五 大旱魃……………(二七一)

第七十六 雨請附古歌……………(一九一)

第七十七 三島明神……………(一九一)

第七十八 貴布禰明神……………(一九一)

第七十九 白雨コウチ願附嘉雨ホウラフ……………(一九一)

第八十 秋季早霜……………(一九三)

第八十一 朝霧……………(一九三)

第八十二 春風……………(一九三)

第八十三 夏風……………(一九三)

第八十四 秋風……………(一九四)

第八十五 秋脈東風……………(一九四)

第八十六 暴風……………(一九四)

第八十七 冬風……………(一九四)

第八十八 雪積冬……………(一九五)

第八十九 雪不降冬……………(一九五)

第九十 藍附會津傳……………(一九五)

第九十一 藍生葉秤目……………(一九六)

第九十二 藍一反作藍種子……………(一九六)

第九十三 古藍種子……………(一九六)

第九十四 種子藍刈附會津傳……………(一九六)

第九十五 藍種子ふせ場……………(一九七)

第九十六 藍種子ふせ敷積……………(一九七)

第九十七 藍種子ふせ附鄉談……………(一九七)

第九十八 藍返作附鄉談……………(一九八)

第九十九 藍苗植行……………(一九八)

第百 藍蕨掛行附會津傳……………(一九八)

第百一 藍朽葉取行……………(一九九)

第百二 藍刈行……………(一九九)

第百三 刈藍干行附會津談……………(一九九)

第百四 藍打行附會津藍扱……………(二〇〇)

第百五 藍玉干貫目取附會津傳……………(二〇〇)

## 會津歌農書 下之本

### 第一 農業 油斷

其わざをわすれて作の實らぬはいかに油斷の故としらすや  
たをれける後刈るいねは手間取ると知りても人の油斷するかな  
誰か畑ぞ摘む時あれし紅花を後れて拾ふことの油斷は  
むら鳥の餌にする爲か大根の實りし種子をとらぬ油斷は  
なせひかぬ油斷や大豆の畑中にをのづとさやのわれてとぶまで  
油斷してするかひもなき稻似字をつくらでぬらし雨はとほりて  
水口のかゝり能とて尻土の田はかへりみもせで涸らす油斷さ  
油斷して萬の苗に蓋をせず百五の霜にあはせぬるかな  
朝ごとに畑の煙草の虫とらで疵葉にするは油斷故なり  
胡麻刈をなせ後らせし油斷してさや口の明けこぼれ落つまで

油斷ぞやみのりしそばを刈取らす暴ら風にあてこぼしぬるとは

第二 農業後悔

残してはあすの障を悔ゆるらん其日の内にをへよしはざを  
若き時かせがてあだの樂好み悔てかへらぬ人のをろかさ

第三 危農務

あやうけれおのれは種子をふせもせでもらひ苗待つ空だのみこそ  
ことし早や百五の霜はふるまじと天をはかるは危しぞかし

第四 愚農夫

耕しの手だてもしらすであだ骨をついやす人を愚かとぞ云ふ  
天にいのり地福の神にちかひてもをろかの人の作はみのらじ

第五 農人奢

田水見に長脇差は何事ぞ身の上しらす奢る農人  
春は花夏は日市の見物に稼業忘れてをぐる農人  
富ぬればをのがしはざの耕もわすれておぐる末の淋しさ  
むかしをば人のしらする系圖だてかたはらいたしおぐる農人  
鍬鎌をとらで農夫の世の奢り餘所の見るまへはづかしきかな

第六 欺

灌溉に心をかけし堰はづし數多の人をあざむきてけり  
有る道を通らで作毛ふみ倒し天理に背く人の悲しさ  
作をすて親の教に背きつゝ相撲あそびに何の樂しき  
其ぬしの哀れもしらすで田や畑を  
ふみて通るはよこしまの道

第七 道畝分離

さらでだにゆきくくるしき細道をせふる農夫の慾の深さよ  
あきらかに道祖の神は見給ふぞ道端せぶり心してすな

第八 田地界論

惻恰だておのがよこしまふるまひてみだりに界論サカイロをする哉  
もろこしのとほき昔の物語り畦をゆづりしためし知らずや

第九 田水盜

そのすがたいやしかりけりひとの田の水をぬすみて知らぬ顔する  
あせやぶり樋をはづして水盜む天のいましめ忘れけるにや

第十 田水論

あせ放ち寛取捨田水ほしみだりに論をするぞうたてき  
なせ干田ヒタのうるほふべきや露もなき水あらそひに日々を送りて  
日のてりて田水ほそらば力合せ論ヒトする隙ヒマに堰上げをせよ

第十一 田家構附春場

願くは田家はすべて南向ヒナカのどかにうけてかまへよ  
南向はわけて日をうけ暖かに都ミてしはざの爲によきなり  
農人の家の座敷はせまくとも唯春場をは廣くかまへよ  
つきにはの廣き徳こそ秋見ゆれ稻扱始末手廻りのよし  
庭廻り常にきれいを好めかし掃き溜肥し作のうるほし  
後ろへは樹木を植えよ其家にはげしくあたる北風の除ハラ

第十二 山郷家構

谷川の流れの方へ山郷はすべて向くべし家のかまへを  
谷川の流れにそむき作る家谷を切るとて忌と傳へり

第十三 厩

牛馬こそ居宅の内に飼へよかしはなれ馬屋は瘦せるものなり



馬屋をば廣くかこへよ肥溜も深めに堀りて馬草入れをけ  
同じくは草や土をも削りこみ馬にふませて田畑やしなへ

第十四 厠

かはやをばおほきにつくり其内へ汚水ため桶埋め置けかし  
汚水ためいくつも埋め其桶へ荏粕や灰を入れてくさらせ  
流れをもいれて厠に置きぬればくさりて終に汚水とぞなる

第十五 園 堀 草

居やしきのかこひの堀に壘あらば菅菅等をはなしおけかし

第十六 居 木

据木をは所と土地に相應はしく木の實のなるを植ぬるがよし  
みつぎもの持ち來るべき木を植よ實生らぬたぐひのぞけ必ず

第十七 瀾 水

せゝらぎの落る尻へは桶しづめ汚水をためよ作のこやしに  
埋め置きし汚水の汲所もろくの作りやしなひよきものぞかし

第十八 汚水溜桶沈所

馬屋尻又は最寄を見合せて汚水溜桶うづめ置べし  
溜置し汚水の桶へせんたくの水のたぐひを入れたるもよし  
腐りたる汚水を汲て田や畑の養ひにせば作は育たん

第十九 塵 穴

塵穴を裏に掘り置き朝夕のはきだめ入れてくさらすがよし  
はき込みしちりとあくたのくさりこそ田を養はむよきこやしなれ

第二十 灰 捨 場

あつき灰捨る場所には心して家のあたりを避けたるがよし  
忘れてもたはらに取りしあつき灰かならず置くな戸傍<sup>トソバ</sup>側に

第二十一 肥 器

桶や槽<sup>フナ</sup>戸の口ごとに埋め置きなほざりにすな屎<sup>フス</sup>尿始末を  
始末して諸菜作れる其畑へ注げ小便そだち格別  
願くばかめを埋めよ朽もせずよはひ久しく益は萬劫

第二十二 農 人 思 惟

田植をば霽日に思へ水つもり多きもわるし猶やすくなき  
水たらず積りの田坪残しては重て植ゆる手間となるらん  
思惟してぞ田へとはかりにかたよらで諸作のわざにかけていそしめ  
絲口のみだれし年は思惟かたし只ねり出せ綾のひとすじ

第二十三 農 人 同 志

耕しの明け暮に唯農人は己が同志見て上みぬがよし  
其同志に背いて上にまじはらば農家はたぬ基とぞしれ

第二十四 冬 田 作

來ん年はよくたがやさむ是非とも冬<sup>フユ</sup>の行のまことしき哉  
冬のまの手だてばかりぞまことしきさあらぬわざは偽にして  
懲り性もなき地作りぞその田をばつくらで冬の糶<sup>カウ</sup>に飢たる  
春の田のためとて冬になす行<sup>ユキ</sup>之をぞ冬の作りとはいふ

第二十五 二代農人盛衰

親富て耕しけるをいつしかにをとろえにける子の代<sup>コ</sup>悲しき  
親の代<sup>コ</sup>は乏しかりしをいつとなく富て耕す子こそ賢しき  
かねてよくをしへみちびけ農の道子のおろかさぞ親の耻なる

第二十六 田 畑 疇 園

あせかこひ柳をうゑよ夏刈れば田にもさはらず薪にもよし

夏刈ればまたくる春にもえ出でてもとのかこひになるは柳ぞ  
粟黍ぞ畑のほとりに作れかし障りなくして圍ひにぞなる  
桑楮作れば益もあるものぞ紙すき又はやがこひとして  
桑楮畑のほとりはかたく思む作りの爲めにあしきかこひと  
ひとすじのしはざばかりにかたよらで唯手廻しのよきを案せよ

第二十七 田畑利得

田や畑をうなふに障る中の石取捨よかし後の爲めなり  
大石は土と離して捨てよかし少しの手間のついえなりとも

第二十八 作喰虫禽獸

諸作の莖のなかごを刺のぼりいためてからず虫のにくさよ  
作莖の心さし通す虫故になかござしとは呼ぶとみえたり  
爰元のなかござしをば阿州にて筋間通しとよぶとききけり  
諸作のくきのふしあひ通すゆへよどほし虫とひとのいひけり

よどほしやなかござし虫よく見れば名こそことなれ同じ虫なり  
夏の田へあだをなしたる稲虫を賤か稱へにはふちうといふ  
菜大根からしにつきし昆虫を菜虫とばかり稱へけるなり  
ともすればひしとくき葉に取付て畑作からすありくい虫  
ありくいを阿波にてきられ築紫にてのだれといへる説もありとぞ  
山にすむ其もろくのけだものはよるこそ出て作の實を食へ  
さと郷の犬や狐は夜毎にうれたる瓜をさがしくふなり  
田の作や畑の作の色品を萬の鳥のくらふうたてさ  
土底に籠りて作の根をくふは白き根きりの虫のわざなる  
黒根切虫はうかびて諸作りの本をくふなり土の際より  
かたつむり夜ははひ出で瓜茄子の苗の若葉をなめからすなり  
畑の底くぐりてあゆむもぐらもち萬の作の根をからすなり  
野鼠もあだをなすなり畦の中くぐりて田水もらしぬるゆえ  
畦ぎはの稻喰ひちらし畑作のくき實倒すも野鼠ぞかし  
折を知り里へ渡りてかはらごや分けてくふなり大根種子をば

麻の種子まきたる畑をよく知りて拾ひあさるはかはらごの鳥  
 はね子虫瓜や茄子の苗の葉に狂ひたかりて吸からすなり  
 はね小虫かたち小さく色黒き故に山柳むしと稱へき  
 とりわけて作をあらすは村雀秋の稻田にむれとび來り  
 色黒くかたちの丸き飛虫はひしと取付大豆葉を喰ふ  
 蛾といふ虫の形はあらはれず土底にこもり禾の根を食ふ  
 兩年に稻葉に付て吸ひからす其泥虫はとらへがたかり  
 畑作にあだをなすかも村烏うれたる瓜をもとめさがして  
 ねざし虫かたちはみえず稻かるゝ蛾のたぐひか心許なし  
 からけ虫稻の葉寄せて巢ごもるはまた蝗虫のたぐひなるかも  
 畔まはり稻穂こぼれて見えけるは蟻のなせるしはざるかも  
 ことの外に異色異形の虫付て萬の作へ障るうたてさ

第二十九 天 道

四つの時氣候時令のさだまりて萬物化すは天の道なり

第三十 地 利

水田種子陸田種までかたよらす養育するは地の理ならずや

第三十一 人 事

燥濕の土質わきまへ天地の化育助けよ人の爲なり

第三十二 氣 候 不 正

天の氣の正しからざる年ありて春の日寒く夏ひやゝかに  
 はるさめと夏ゆふだちのありとても秋氣不正に稻みのらじな

第三十三 氣 候 順 正

唐土の聖の御代の氣候順五風十雨の例しありとぞ  
 吹く風に枝も鳴らさず降る雨に地の塊おかさぬは正

第三十四 三月末霜

彌生末二日かゝりてふる霜を春の八十八夜とぞいふ  
置く霜を八十八夜と稱へしは春立つ日より數へ始めて

第三十五 四月之中霜

はからずも四月の中にをりる霜夏の百五となへけるなり  
四月ふる百五の霜はさと郷へ百十日までをりることあり

第三十六 五月の節霜

年により里郷毎に露霜のふるは五月の節までぞかし  
來陽のをそき嶽下山下は四月すぎても本霜ぞふる

第三十七 九月の節霜

居半に露霜ふるはつたへにも九月の節の頃なりといふ

嶽下の寒さをいそぐ山郷は九月よりはや本しもぞふる

第三十八 九月の中霜

さと郷へ九月の中にふる霜は秋の百五となへけるなり  
九月ふる百五の霜の日積りは冬の暮よりあとに繰るなり

第三十九 十月の始霜

十月の三日の朝にふる霜を冬の八十八夜とはいふ

第四十 四時霜間

四時ふる霜と其間の日積りは七十二候三つに分れて  
四時ふるすべての霜をあらはすは畑の作りの種子おろす爲

第四十一 東作業

朝日かげ先づさしむかふ東に人かしこしな諸作を植ゆ

東に作れとぞいふことはりは春耕すに事かようなる

第四十二 鋤 使 陰 陽

畑うなひ二鋤さしに先使ふ本來之を陰鋤とぞいふ

畑のうねあはする時に三鋤さし使ひけるをば陽鋤とぞいふ

第四十三 農事圃業三數

畑打に先鹿伏と中切と種子まくまでに三つの數なり

畑の畦一間内に三つ立つる元來之も天地の數

はた作のくるめ三度と稱ふるも本來ふくむ天地の數

蘭草こそ一把の廻り三六寸是も定まる天地の數

田畑の一畝といふは三十歩もとよりこれも天地の數

間つもり三距一間ある事も自然にかなふ天地の數

一番子三七日に耘るはこれももとより天地の數

田と畑の陰陽兼る其年はもとよりこれも天地の數

天地人三つの其數かたどれば農事圃業はいともやすけし

先春の鋤入初に三くは宛苗代割ふ天地の數

田はたきの左右割ひは三鋤づゝもとより使ふ天地の數

田を打に先春發し塊かへしかへしうなへば三つの數なり

種子扱を水にひたせし其積り三十日も天地の數

耕日に先一番子それよりも二三の草は天地の數(此歌意味不詳——校訂者)

むかしより一把のいねを三手打に刈取るならひ天地の數

刈稻を穗似字にするに三把宛違へてつむも天地の數

田の畔を削りてとるに三鋤宛使ふはもとより天地の數

畔ぬるに泥打かけてなづる時三くはつかふも天地の數

あらくれとなかしろに又植前と三度搔くのも天地の數

苗代の鹿塊かきのなるゝまで三度かくのも天地の數

種子は先づ明に向ひてまき初め三度するのも天地の數

田植初め明に向ひて先づ三株植えぬることも天地の數

稻穂をば明に向ひて三録刈り神に供ふも天地の數

上中下三つにわかれる土くらゐこれ又もれじ天地の數

青引のまめのしめ繩三尺に定りたるも天地の數

三鎌かり麥の初穂をひこぼし(兼牛星)の牛に供ふも天地の數

田も畑も三百坪を一反と名つくることも天地の數

第四十四 農家本末

耕しは先づ家の本其外のはげみは末のものと知られし

百千モトナナのさそひありともわきみるな耕してこそ家はとゝのへ

第四十五 農事先後

田と畑のためになすべきもろわざを都ていそしみ勤むるがよし

後れたる事しなければたがやしのわざをば先にはたし置けかし

あとさきの事をちがへて勤めなば作のみのらぬ基と知るべし

第四十六 牛耕

牽牛の星は耕す神といふ五穀の本も天アマにこそあれ

天の川流れをくむかいづ方も田を耕すに牛を用ひて

第四十七 馬耕

しらざりしいつの頃よりかくも田の耕しに馬を使ひそめけん

牛馬のへだてはあらじ耕しはかしこき人の教へなりせば

第四十八 堯象懷慕

唐土タカラの大舜いまだ民の時其田を象のたがやしにけり

.....

.....

.....

.....

〔以上六首校訂者に於て見る所あり削除したり〕

歴山に至りて舜はをのづから小田を耕し世を渡りけり

大孝をはげます舜の名の譽れ雲の上迄聞へつる哉  
帝堯は孝を感じて大舜は天下の國位譲り給へる

第四十九 猪 之 耕

會津山ふもとの里の苗代を猪の耕しと誤りて謂ふ  
傳へには猪の耕しになぞらへて猪苗代湖と名付たりとか  
唐土も倭もおなじけだもの、耕せる代は聖なりけらし

第五十 火 耕

初生へのからむし刈て焼きけるを火のたがやしとつたへいふなり  
山の平草木刈りほす狩野焼を火の耕しと文字に書くなり  
そば蒔くに干切畑の草焼くも火のたがやしのたくひとぞ知る

第五十一 立 春

くり返し春は來にけりけふよりは作の耕し賤のをだまき

春立つと聞より早く農手立心にかけて節を忘るな

第五十二 早 春

實に春の節早ければ農のわざ急ぐこそよけれ油断はしすな

第五十三 二 月 餘 寒

見渡せば物種子よせるきさらぎのけしきは尙も去年のまゝなる

第五十四 氷 解 田 面

のどかなる賤か門田のうす氷残らぬまでにとけをへにけり

第五十五 雪 消 圃 面

みわたせば圃のをもての雪消て麥のさく切る節となりけり  
東風の吹き圃のをもての雪消て養ほどこす節を知らせぬ

第五十六 三 月 盡



種子まかでをくれし人やくゆるらんあすはと待ちし春のわかれを

第五十七 更衣

いつしかも春を忘るゝ夏の來てけふは手出裸の衣かへけり

第五十八 四月盡

けふたちて明日にもならばさと郷の田植最中の歌をきかばや

第五十九 五月盡

今朝見れば山田のこらす植にけり時を違へぬ村人ぞよき

第六十 六月土用

六月の土用頃より心して拵へ置けよ大根まく地を

第六十一 七月

いつか田の夏耘りに日數過ぎ早稲を刈るべき秋は來にけり

第六十二 八月不時霰

夏の日のはかに寒く雨あられ不時にくだりて作はいためり

第六十三 秋彼岸

うれしくも秋のひがんを早むかへ又來る年の糧麥をまく

第六十四 九月盡

をしなべて稲刈あげをいそぐらし暮行く秋もけふばかりとて

第六十五 十月

冬近し家の内面のかたづけを疾くにいそげと告げにけるかも

第六十六 閏月

聞ある其次年は春雪のかのこへ馬把かくるとぞいふ  
ことわざにかの子へ馬把かくるとは農節早き事を云なり

第六十七 五月 雨

しづが田の植え水願ふその折に降る五月雨はよろこばしくて  
わけて此五月雨こそはかき田の植代水につかはれてよき

第六十八 雨露潤諸作

折にふるあめのうるほひ田と畑の諸作の母とひとのめでけり  
朝な々々葉におく露のうるほひは恵みぞ深き作の母なる  
諸作の葉末に結ぶ露零莖をつたひて根をうるほしぬ  
根にたどる露にうるほひ畑作は秀で、實りよろしかりけり  
葉のひろくのびたる作は日まけする莖下とほく露おつるゆゑ

第六十九 秋 急 雨

さだめなき秋のならひのむらさめに心得てよし萬ほし物  
ほしちらし置たる稻にむら雨をかけざるやうにせよや取りあげ

第七十 彌 時 雨

まだ作をしまはぬものは稻時雨ふる音聞て夜目もねむれず  
もし雪にかはりて降らばいかにせん時雨またもや作にさはらん

第七十一 霖 雨

諸作りの父母にてあれど長雨の過てはあだになるぞうたてき  
六月と初秋にかけて長雨のふれば諸作みのりあしきぞ  
取わけて陰氣のつよき山郷は長雨なれば不作増なり  
長雨に地底しまりて根は朽ちぬ殊更瓜のつるは枯れけり  
薄地にて日にやけ易き畑方は長雨ふればよき作もあり

第七十二 雨 霽 祈 附 古 歌

かきくもりいく日も雨のふるならば晴をいのらん初穂祭りて  
長雨のはれを祈るはむかしより山雨の祭り例にまかせて

古歌 雨ふれば川も廣瀬の波わけて

はるゝを神にいのりするなり

其の邑の鎮守に祈れ雨はれを

いづこも同じ祭りごととして

第七十三 難 降 雨

かきくもりふるかと思れば雨雲はあとよりはれてもとの青空  
いく度も山にはかゝる雨雲の何とて里へつれなかるらん

第七十四 旱 魃

春ひでり塊田かはきて稻によく麥にあしくて夏の糧なし  
六月のひでりの年はをしなべて稻の草生ひ秀でこそすれ  
秋の空ひでりつゞけばいつとも稻のみのりのよしときこえ

第七十五 大 旱 魃

大ひでりこの田かの田の水かれていづれの里の稻も焼けにき

第七十六 雨 請 附 古歌

早魃の日數積りて土かはき作にさはらば雨請ひをせよ  
高き山淵のほとりに世を舉り雨請ひするは作の爲なり  
たかき山ふちなき里は居ながらも神に祈りて雨をよぶなり  
早魃に雨請ひするは古への祈雨の祭りの例しなりけり

古歌 雨雲は立ちけるらしも水ぬしの

神にいのりをなほやさゞげん

第七十七 三 島 明 神

古書に曰、此御神は伊豆の國加茂の郡、攝津の國島下郡、伊豫の國の郡いづれも三島明神と云ふ、  
伊豫の守實綱そのころ世の中早魃せし時、伊豫の三島に勸請したまひ、能因法師に歌をよましむ。

天の河なはしろ水にせきくたせ

あまくだります神ならば神

此歌にて三日三夜止ますふりしとの歌家にあり。

第七十八 貴布禰明神

古書に曰貴布禰の明神は雨請ひにも亦雨を止ることに効驗ありとて、人々此御神に祈れり、むかし旱魃の時、賀茂の幸平が歌に

おほみ田のうるほふばかりせきかけていせきにおとせ川上の水

とあり、又古歌に

らい太郎作のよかりしゆふだちを質にをけるかひとふりもなし

とあり。

第七十九 白雨願 附嘉雨

夕立の雲の行方をひたすらに此方へさそへ遠路の山風

ねがふよりはや夕だちの雲みへてあしとく雨の降りて來にけり

此頃のてりにやつるゝ諸作りにそゝぎて嬉し夕立の雨

第八十 秋季 早霜

いかゞせむみのりもまだき晩稻にいたくも結ぶ秋の早しも

秋早く霜のむすべは晩稻のいたみてみのりかひなきぞかし

第八十一 朝霧

霧はるゝ程やいかにと里ごとに先づ語りあふあさの空あひ

立てこめしきりはしづかにはれそめぬ先づ大豆うたん何をおいても

第八十二 春風

春霞長閑に空に吹く東風の音はおもしろく種も笑めとて

第八十三 夏風

夏の來てさなへそよゝ吹風に植る田面はいとしげるらん

第八十四 秋 風

田も畑も心のまゝにみのりけり秋颯々の風のまにまに

第八十五 秋 厭 東 風

秋風に稻のみのるは常なれど東風の烈しく吹くを厭ふも  
うじとのみ秋吹く風をいひけるは稻のみのりにさはる故にぞ

第八十六 暴 風

秋仕舞いかに心のまゝならむ絶て暴風の吹くなかりせば  
願くばわきめもふらで蕎麥の實のこぼれぬ先に刈りて取らまし

第八十七 冬 風

聞くもいやみぞれまじりの風音は冬作しまふさはりとぞなる

第八十八 雪 積 冬

冬雪のつもるほどよし翌年の夏田も更に水多くして  
堤井の土底うるほひ水持のよきも冬雪積る故なり  
冬雪の深くつもれば翌年の土濕ひて作りよろしき

第八十九 雪 不 降 冬

冬雪のふらぬを厭ふ地作りは翌年畑の虫多しとて  
昔より冬雪ふらぬ翌年の諸作の出来は中とこそ聞け

第九十 藍 附會 津 傳

過ぬる元祿十一年戊寅の年、衣更着の末方、四國阿波國名東郡猪津の住人、仁木氏三右衛門尉政義、  
安戸氏孫太夫正秀といへる兩翁、當郡に來り住みて、藍畑手作したまふ也、予は藍國にのぞみて其業  
微細に見、これを一巻の書に綴り置きたり、其あらましを此歌農書に記し侍る。  
あいの名は大がらあいに又小がらあいこの二品を作りてぞよき

本來は槐藍又は大藍に蓼藍といふ三品あるなり  
會津にてよぶは丸葉か槐藍か長葉藍をば蓼藍と云ふ  
阿州にてよぶ大がらあいは丸葉藍小がらのあいは長葉なるらん

第九十一 藍生葉秤目

小がらひの生葉百まい其重さ十九もんめも有と知るべし  
大がらひは生葉百まいその重さ二十一もんらめありとこそ知れ

第九十二 藍一反作藍種子

一反に植る藍苗ふするには種子五合にてよしと知るべし

第九十三 古 藍 種 子

ころろみに古のあい種子まきおかばひとせこすも生へざるぞかし

第九十四 種子藍刈附會津傳

あいからは跡より萌る二番ほき九月の中に刈て取べし  
會津にて一番あいを種子に立つ雪國なればおそし刈りあと

第九十五 藍種子ふせ場

あい種子のふせ場はいつも戸屋敷の内こそよしと心得よかし

第九十六 藍種子ふせ敷積

あい種子をふせる地敷はをほむねに十歩程にてよしと知るべし

第九十七 藍種子ふせ附郷談

春畑に植るあい苗そのたねは雪の消えなば二月ふすべし  
麥しりにあい苗植るその頃は青穂のさきをゆふ時ぞかし  
藍の種子一日一夜水にかし其翌の日にかはかしてまけ  
あいの種子まきたる上にだらごやしふりて土をば薄くかくべし  
會津にて刈とりしその麥あとを阿波の國にて麥しりといふ

第九十八 藍返作 附郷談

藍作は返してわるし年ごとに植る畑をば取かへよかし  
會津にてかへしづくりと談りしを阿波の國にていやじりといふ

第九十九 藍 苗 植 行

あい苗を植る畑には一けんけんに畦の敷をば四つたて、よし  
ひとかぶに二三本づゝ藍の苗植て根土をふみつけておけ  
苗たけの延び過ぎたるは根を深く引込うへておさゆるがよし  
藍苗をひでりの折に植えんには其根を水へひたせかならず

第 百 藍糞掛行附會津傳

葉糞コメをば藍の作りの上よりも脇(糞肥)にそだらをかけて置けかし  
葉こえをば藍刈あぐる十日前それまでかけよ色のつきよし  
藍作に馬糞かけなば目も軽く色黄ばみて品は落ちなん

葉上よりそゝぎしこえは藍の莖にたまりてあしと會津傳に云ふ

第百一 藍朽葉取行

ねせ藍に枯れ葉まじれば玉にして品のあしきぞ取り捨てよかし  
藍くきの下葉あがらば馬把ウマヅにて畦のあいだをかきたるがよし  
まぐはにて藍にさはればそのかれ葉残らず落るものと知れかし  
馬把にてならずも枝にあててよし朽葉落るは同じ事なり

第百二 藍 刈 行

あい刈るは未明頃より五つまで陽氣あたらばやめよかならず  
夜刈らば夜の氣のまとひ朝刈らば朝霧ふくみ性のせうつよきぞ

第百三 刈藍干行 附會津談

藍刈りて干すには刈りし其畑の株にねせかけ日にあてよかし  
其畑のこえたる土のうるほひを干したる藍に移すすべにも

干流し雨さへふらぬものならば夜露のうるほひ受くるこそよけれ  
藍のからこぎませほしてねせぬれば加減よしとは會津傳なり

第四百 藍打行附會津藍扱

前庭に干したる藍の其葉をば連糊にてぞ打落すなる  
刈藍の生葉をすぐにこぎ取りて庭に干すは會津傳なり

第四百五 藍玉干貫目取 附會津傳

ねせ藍を春きて堅めて簀の上にをきて天日にさらし干すなり  
玉にして六分取とは干し葉藍一貫目ねせて六百目なり  
ねせ藍の丸めし玉をかけ干にするは會津の傳なるぞかし

會津地方歌農書 (上・下)



會津地方歌農書 上之本 目次

第一、土	體	.....	(三〇九)				
第二、眞	土	.....	(三〇九)				
第三、黄	眞	土	..... (三〇九)				
第四、山鳥	眞	土	..... (三〇九)				
第五、土	味	.....	(三一〇)				
第六、土	色	.....	(三一〇)				
第七、土	輕	重	..... (三一〇)				
第八、土	位	上	中	下	..... (三一〇)		
第九、諸田	の	位	.....	(三一〇)			
第十、川	押	田	並	稻	..... (三一〇)		
第十一、蘭	田	並	植	付	刈	時	..... (三一〇)
第十二、蘭	草	水	附	草	取	..... (三一〇)	
第十三、新	田	.....	(三一五)				

第十四、川邊路際田……………(三〇五)

第十五、通し苗代……………(三〇五)

第十六、額付苗代(植付苗代)……………(三〇六)

第十七、田の水口……………(三〇六)

第十八、種子浸定法附早稻種……………(三〇七)

第十九、種子揚時……………(三〇七)

第二十、種子蒔時……………(三〇七)

第二十一、種子扱拵……………(三〇八)

第二十二、種子持樣……………(三〇八)

第二十三、古種子洗種子白干種子……………(三〇八)

第二十四、一反種子積……………(三〇九)

第二十五、田反作の苗代敷の積……………(三〇九)

第二十六、一夫耕田積……………(三〇九)

第二十七、分杭……………(三〇九)

第二十八、堤……………(三〇九)

第二十九、埋種……………(三〇九)

第三十、堰揚附砂凌(江凌)……………(三〇九)

第三十一、水輕重……………(三〇九)

第三十二、清水濁水……………(三〇九)

第三十三、種子池凌……………(三〇九)

第三十四、種子浸……………(三〇九)

第三十五、種子揚……………(三〇九)

第三十六、苗代剖(鳥生)……………(三〇九)

第三十七、苗代扱……………(三〇九)

第三十八、苗代測並注連……………(三〇九)

第三十九、種子萌……………(三〇九)

第四十、種子蒔……………(三〇九)

第四十一、田植付……………(三〇九)

第四十二、田剖(鳥生)……………(三〇九)

第四十三、畔削……………(三〇九)

第四十四、陸田塊耕……………(三〇九)

第四十五、卑泥田……………(三〇九)

- 第四十六、龜塊搔……………(三〇四)
- 第四十七、畔塗……………(三〇五)
- 第四十八、揆田割(鳥生)……………(三〇六)
- 第四十九、苗に忌……………(三〇七)
- 第五十、植代搔……………(三〇八)
- 第五十一、杓摺……………(三〇九)
- 第五十二、水口の切替……………(三一〇)
- 第五十三、田植手段……………(三一〇)
- 第五十四、縹取心得……………(三一〇)
- 第五十五、早苗三七日の變化……………(三一〇)
- 第五十六、早苗分、離……………(三一〇)
- 第五十七、朝草刈初……………(三一〇)
- 第五十八、田肥養……………(三一〇)
- 第五十九、里郷鏡草附鋤留……………(三一〇)
- 第六十、山郷青刈敷附鎌留……………(三一〇)
- 第六十一、坑肥……………(三一〇)

- 第六十二、川堀微肥……………(三一〇)
- 第六十三、牛馬野飼……………(三一〇)
- 第六十四、山々牧馬……………(三一〇)
- 第六十五、苗代水……………(三一〇)
- 第六十六、田水……………(三一〇)
- 第六十七、濕田燥田水……………(三一〇)
- 第六十八、夜水引……………(三一〇)
- 第六十九、耘……………(三一〇)
- 第七十、蝗……………(三一〇)
- 第七十一、難捕いなむし送……………(三一〇)
- 第七十二、田崎合稗……………(三一〇)
- 第七十三、案山子鳴子……………(三一〇)
- 第七十四、稻日數……………(三一〇)
- 第七十五、稻刈時……………(三一〇)
- 第七十六、刈稻立様……………(三一〇)
- 第七十七、稻干……………(三一〇)

第七十八、稻揚雜事……………(三〇〇)

第七十九、稻似字積所……………(三〇〇)

第八十、稻扱……………(三〇一)

第八十一、秋田割(鳥生)……………(三〇一)

第八十二、田冬水附春水……………(三〇一)

第八十三、寒國不合稻……………(三〇一)

第八十四、取合不合稻……………(三〇一)

### 會津地方歌農書 上之本

#### 第一、土體

本よりの土體は黄色方四隅世の中央に位するなり

#### 第二、眞土

上中と名付し土に自ら眞土の性のこもらぬはなし

#### 第三、黄眞土

本色の其性重き黄眞土は田畑ともに土の第一

#### 第四、山鳥眞土

黄色につしみ黒色斑土、之を山鳥眞土とはいふ

黄眞土も山鳥土も諸共にみのりは同じ心とぞ聞く

第五、土 味

下土すく上土あまく其外の土にも味をふくまぬはなし

第六、土 色

青き土赤土共に諸作のそだちかねけり田にも畑にも

第七、土 輕 重

黄眞土をはかりに懸て壹升の重さを見れば五百二十目

黒眞土はかりに懸て壹升の重さは五百十匁なり

白眞土重さいかにと尋ぬれば壹升の重さ五百匁なり

砂眞土先づ大方に一升の重さは四百九十目と聞く

野眞土をはかりに懸て壹升の重さは四百七十目なり

徒眞土の重さを見れば大方は壹升四百四十目とぞ知る

砂土の重さを見るに押なべて壹升四百八十目なり  
壹升の野土は四百三十目はあましの積なりけり  
壹升の徒土三百七十目とりわけ輕き土とこそしれ

第八、土位上中下

白眞土黒眞土また黄眞土は上の位と定りにけり

野眞土にまた徒眞土に砂眞土三品は中の位なりけり

砂土と野土と徒土此三つすべて下の位にありとこそ知れ

壤土にてゆるく肥たる黄眞土は田畑の位上の品なり

黒眞土つしみ黒して細かなる田畑の位上の中なり

黒土の中に黄色のこもれるを薰土と稱へけるなり

薄白く和らかなりし白眞土田畑の位上の下ぞかし

白壤に砂の交はる砂眞土田畑の位中の上なり

黒壤に野土交れる野眞土は田畑の位中の中也

色黒き徒土と共に徒眞土は田畑の位中之下ぞかし

うごもりて色薄白き砂土の田畑の位下の上と知れ  
あらこはく色青黒き野土こそ田畑の位下の中と知れ  
水もたす養ひ受けぬ徒土こそ田畑はなべて位下と知れ

第九、諸 田 の 位

前後に水をほしたる陸田こそ位は元の土になりけれ  
地底石うはごみ淺き薄き田は上土にても下位にかぞへて  
ふけありていつも冷えける濕氣田はとにかく之も下位とこそ知れ  
あさき江の水の少きかはき田の位の程は土によりけり  
水多くぬかる谷地田は冷ぞする上土にても下位にかぞへて  
村尻の汚れのかゝる濕田は上土にても下位に落ちけり  
水と土常に等しき卑泥田の上土のみは上位とぞ知る  
山峯の片さがりなる北の田の位は元の土によりけり  
隔木田と云ひならはせる楷田は棚田と同じ姿なりけり  
濕りさし柔かむきの眞土田に麥をば蒔けと人の教へし

麥を田に作れば稻にさはらむも夏に乏しきかての補ひ  
水かれて雨のみ待てるかはき田を天水田とは稱へけるなり  
濁り江の常にかゝれる村尻の田は肥過て出穂に障れり  
ひたすらに手入れをすれば熟田の稻のみのはいつもよろしき  
耕しに心盡せど元よりの迫田なればや稻のみならず  
涌水の過て冷えける水田には稻草よりも稗のよろしき  
冷水のかゝる田坪も末ぬるく尻土にし置けば地味は肥えけん  
尻土田そゝぐ水口をよく見合て養ひするに加減せよかし  
同じ水ひとつ肥しを與へても窪田の稻は出來まさるなり

第十、川 押 田 並 稻

去年の秋川押ごみのかゝりなば肥扣へても稻はみのらん  
川押田ごみかからずば養ひを常の如くに入れたるがよし  
河水に押倒されしごみ稻は洗ひも立てず其儘に置け  
其儘に立てたる稻はげにもよし洗ひ立てなば揉めて痛まん

河押に伏たる稻は苳らすして置けよ少しは實りとれなん  
河面のごみに埋もる稻ならば時を移さず堀出せよかし

### 第十一、藺田並植付刈時

肥過て枯るゝ田ならば藺を作れ稻より益の多きものなり  
藺草をば去年の九月の内うへて今年土用の内に刈れかし  
時後れ植る藺草はむかしより根付かぬものと言ひ傳へけり  
刈り時をあやまるならばいなご虫藺草の末を喰荒すらん  
常立の藺草はいつも定まりて五月の内刈取よかし  
常立の藺草かりける跡の田へ作りてよきは稻と稗なり

### 第十二、藺草水附草取

冬の内藺田の水口留置て春になりなばせけよかならず  
雪の内ほして春水懸ぬれば藺草のそだち秀でぬるかな  
雨降に藺田の小草をとりてよし葉に着く泥を洗ひ流して

葉草とる其時どろの藺の莖に着きなば痛み育ちかねけむ

### 第十三、新田

荒田發し始の土は下にあれどやがて位は上になりけむ  
石地にてうは土薄き新田もごみの溜りて肥ゆるものなり  
野を開き三とせあら田の貢物納めぬ内を貢野と云ふ

### 第十四、川邊路際田

來ん秋の増水の程は知らねども川邊の田には早稻作れかし  
道際の田には幾つも溝を切り汚水捕へて養ひとせよ

### 第十五、通し苗代

とほし田は苗とりし後を幾度もうなひ返して日當つるがよし  
とほし置く其苗代は土肥てまた來ん年の爲によきなり  
苗とりて稻も作らぬ跡の田を通し苗代とひとは云ふなり

第十六、<sup>カヒツケ</sup>穎付苗代(植付苗代)

昔より苗取跡へまた稻を穎付田<sup>カヒツケ</sup>として作り來にけり  
苗とりし跡をばいとねもごろに耕して置け來ん年のため  
まきは稻干す事なけれ苗代へ草稗こぼれ苗の爲あし  
是やこのまきは稻とは苗代へ刈田の稻を運びほすこと  
肥土をふくめる川の流れをばわけても注げ穎付田<sup>カヒツケ</sup>には

第十七、田の水口

押込まぬ除の爲なり田頭のいち水口を水道にせよ  
定まれる水口よりも外に又水口構へ高く切り置け  
常よりも多く水口切り置くは増水落す爲めなるぞかし

第十八、種子浸定法附早稻種

種扱をひたす日數は昔より三十日を法<sup>ホウ</sup>とするなり

種蒔て萌ゆる日數の定法は何れの里も十日とぞ云ふ

種蒔て日數三十五日目に早苗をとるも定りの法

苗植て日數七十五日目に稔るはいつも早稻の定法

七月の中に當りて定法の日數は凡そ百五十日(此歌意味不詳——校訂者)

里の田の種子ひたりこそ二月中山里にては十日あとなれ

種浸す時さへいつもたがはねば稻の稔はいつも宜しき

第十九、種子揚時

里々の種のがりは彌生中山々にては四月節已後

あげて見てくさみをふくむ其種を蒔く事なけれ苗違ふなり

第二十、種子蒔時

里郷<sup>サト</sup>の種の蒔時三月の土用の終り三日前なり

山郷の種の蒔きつけ四月中里郷よりはいつも遅けり

種子おろす時節は野邊の草に開け又庭の花の咲くを見てせよ



種蒔を知らずば桃の花に問へ半分咲ける折がよきなり  
種蒔に花は咲きけり初櫻むかしにちなむならひなるかも

第二十一、種子 扱 拵

種子とらば交りなき扱拵へよしいなの扱を去りてこそよき  
種子扱は稻こぐ時に赤米をゑり出し除け後の爲なり

第二十二、種子 持 様

扱種にしめりのあらば苗違ふ居屋の高みへ釣し置けかし  
種とらば出来の宜敷其稻を幾日も干て置たるがよし  
願はくばちかに積むなよ種扱に地いきあがりて性根盡きなん  
種扱を萬の穀の下積に必ずするなふけて悪しきぞ

第二十三、古種子洗種子白干種子

扱種の一年越は生ゆれども二年通せば生えざるぞかし

二年越の古種浸し置き見れば池の中にて腐りこそすれ  
洗ひ種苗の育ちは早けれど秋の稔りは三よさをくれん  
人知るやあらひ種子とは常の扱一夜浸して置くことぞかし  
しらほしの蒔時遅くも其種は秋の稔に替る事なし  
蒔き餘る扱を日に干し乾かすを白干種子と稱へけるなり

第二十四、一反種子積

里の田の十畝の種子を積り見れば七升蒔とかねて知られし  
蒔種もところによりて大苗を植へる折には入れ増しをする  
水冷て大苗植へる山田には十畝の種子は一斗蒔なり

第二十五、田反作の苗代敷の積

里の田を一反作る苗代の敷は十五歩さては二十歩  
山田には種扱多く蒔ゆへに苗代敷は一畝程なり

第二十六、一夫耕田積

田にもより所によれど一人して作る積りは七十畝なり  
十畝の田へ四十人数の入積り七十畝にて二百八十(此歌意味不詳——校訂者)  
二月より耕し初てとり納十月迄に九つの月  
九ヶ月を日々に壹人と見積れば二百七十人となるなり  
積りなく日數かけなば一人して七十畝をば作り兼ねべし

第二十七、分杭

早して川の細らば分杭を堰に打ちつゝ水を分けとれ  
堰口ヒヤクダに分杭打つは水底の浅き深きを積る爲にも  
川水の浅き深きを知らず申いま分け杭といふに同じき

第二十八、堤

ためて置け小澤の雨の流れ水濁りてぬるく田にはよろしき

第二十九、埋樋

横江あり懸樋のならぬ落尻は埋み樋ふせ水を取るべし

第三十、堰場附砂浚(江浚)

早して水細りなば差當ることをやめても井せき揚ぐべし  
井せき堀崩れて砂のあるならば浚へてとれよ後の日の爲  
春毎におのが田坪の江さらへを怠るならば水の涸れなん

第三十一、水輕重

瀬の荒き流れの河のその水の重さ一升五百目なり  
井の水とゆるく流るるぬるま川一升重さ五百十匁  
田の爲に湛へ置きたる堤井の水一升は五百五匁

第三十二、清水濁水

をしなべて清き流は冷やかに水性こはく稻にさはらん  
濁り江のぬるき流は田にぞよき其水性も和らかにして

第三十三、種子池浚

日和見て浚へ揚げ置け池のごみ種かす時はやがて近きぞ

第三十四、種子浸

種子井江は冷てすみたる水ぞよきぬるく濁らば種子にさはらん  
江もあかす池水なくば雪水を懸けても種はひたせるがよし  
籾種は冷えける水がよきゆへに何方にても朝ひたすなり

第三十五、種子揚

種子籾は天氣見合せ日の中に揚げて俵の雫くかはかせ

第三十六、苗代剖(鳥生)

田打ちには餘り急ぐな陽氣待て土ぬくみたる頃がよきなり  
苗代は陽氣を待つに及ばぬぞいつも打つべき時を違ふな  
苗代田何方にても鍬ぞめに明けに向へと教へられけり

第三十七、苗代搔

水冷て身は苦しくも苗代のあらくれ搔は念入れよかし  
中代をかきたるときに苗代へはぐさ敷きつめ肥をならべよ  
泥ゆるみ種は沈まん苗代田五日も前にならし置けかし  
もとよりの泥かたまれる苗代は種蒔く宵にならし置くべし  
苗代の泥ふかければ草入れて餘田より早く均し置くべし

第三十八、苗代測並注連

苗代に苗計り見る木を建てよ種子蒔時の見當によし  
苗代に注連細引くはあだをなす鳥とけものをおどすためなり

第三十九、種 子 蒔

種蒔て十日とならばはや蒔ゆるいざ蒔やさばや法越えぬやう  
長籾の種はひどろに短きは陸田オカダにまきてよき苗とせん  
あつ過ぎててもやしになるもその早苗土性に合はば根は腐るまじ

第四十、種 子 蒔

種蒔は朝こそよけれ昔より夕べにまけるためしなれば  
朝ならば水底見へて蒔き種のむらをたゞすもいとやすくして  
ぬる水はうごきて種の浮ぶゆへ日中に蒔を嫌ふとぞ聞く  
朝蒔にやがて似寄らん夕水もひえなば種のしづみよろしき  
風あれば波にゆられて種動く風見合て蒔たるがよし  
去年の春ひてたる種をかしづけてことし蒔きなば生ぬとぞいふ  
朝まだき好みて蒔くは冷水に種の沈みのよき故ぞかし  
籾種はすぐには蒔かて俵より明けて暫くさましてぞ置く

水口にやき米蒔くは種籾を鳥のひろはぬ除とこそ聞け

第四十一、田 植 付

昔より里の田植は四月末五月の節をなかに用ひし  
里の田は五月はじめの五日目の節句の節に植るとぞきく  
山里の田植の節を人間はゞ五月中とぞ語りきかせよ  
里の田の濕シツクの深き卑泥田ヒドロの冷えの見えなば遅く植ゆべし  
卵の花のつばめる頃に先づ植えよ盛りの頃は遅過ぎぞする  
あきらかに田植の節をいふならばいはらの花の咲ける頃なり

第四十二、田 割ウナヒ(鳥生)

陸田リキをば深くうなへよ卑泥田ヒドロは淺くしてこそ實り宜しき  
卑泥田は早くうなふて日を通せ遅くば莠ウサの茂りそふべき  
日かげ田と草茂る田の荒うなひ鼈甲倒しに鋤き起せかし  
田のくれをあやに返せし其形龜を倒すにたとへてぞいふ

草の立つ通し苗代ひどろ田は女鳥羽成にも打つがよろしき  
打起す田のくれなりを女鳥の羽並揃ふにたとへてぞいふ  
川増て打つ田を水の押すならばくれ轉がしてうなひ直せよ  
前かどにうなひしあら田又打つをくれ轉しとは稱へけるなり

第四十三、畔 削

龜塊をかゝざる前に去年塗りし畔の上つち削りとらまし、  
うは土を削り落してその畔の根ぎはをぬれば水もちのよし

第四十四、陸田 塊 耕

陸田塊残すな反せむらあらば荒塊搔に手間ぞかゝらん  
雨ふりに反せば居付く其くれの干兼ぬるゆへに稻はみのらす  
削り草懸たる田をば先づならしその後にくれ反してぞよき

第四十五、卑 泥 田

ひどろにて草の生へたる水田をばあらくれ前に小切して置け  
ひどろ田を小切して置く其時に切廻しとれ畔の根土を

第四十六、龜 塊 搔

里の田の塊を反すは琉球のつゝじの花の咲き初むる頃  
長春の花も漸く綻びて里のあらくれ搔くところ聞け  
障りだになき事ならば龜塊は田植次第に搔たるがよし  
あらくれをかゝぬ前には水除け打ち田かはかすことよろしき  
堅田をば龜塊搔くに念入れよつぶくれあらば稻育つまじ  
陸田をば馬鋤押立深くかけ卑泥あらくれ浅くてもよし  
あらくれはろくに搔き置けむらあらば植代時に障りありなん

第四十七、畔 塗

たいらなるひどろむきをば片畔に雁木田なるは諸畔にぬれ  
畔ぬりに念入れよかし水持ちて稻はうるほひ育ち格別

第四十八、搔 田 剖(鳥生)

自ら土のしまれる陸田をばうなひ搔田を深くしてよし  
いつとも地底のぬかる卑泥田は搔田うなひの淺き程よし  
卑泥田は其前の日にうなひして土いつかして植えけるがよし

第四十九、苗 忌

田植する宵日に早苗とりて置け餘の田へはこぶ手廻しのため  
願はくば其日の朝に取らまほし植えけん苗をしほらさぬため  
苗とらば菅頭揃へたばねかししどろもどろは後の煩ひ  
根を切りて取りにし小苗植ぬれば病み黒そびてみつき遅れん  
節遅れ老たる小苗とるならば其根をあまり洗はぬがよし  
苗とりて四五日置けば色かはる紅葉苗とは之を云ふなり

第五十、植 代 搔

植代田先に馬鍬を押立てて後はねかしてろくに搔くべし  
植代田水を過して泥ゆるくうはくろひくくかきたるがよし  
畔際に馬を寄すなと縶取によくも教へてかけよ植代  
植代に馬の入らざる深田をばところによりて人のふむなり  
馬持たぬ賤が小田には手しろとて鍬もてならし植もこそすれ

第五十一、杵 摺

杵をばよく摺りならせ植る田を平らになせば水の持よし  
水溜り能くして代をかゝするは杵摺手の役目なりけり  
苗取りし跡の植代かく時は杵はすらぬものところぞ知れ  
杵摺り其わざごとに草ごみの集りけるを搔き散らせかし

第五十二、水口の切替

植代をかくときごとに新しくその水口を切かへてよし  
切かへのかなはぬ畔は其儘にして水口を加減してよし

第五十三、田植手段

苗本と坪あひなどをよく積り田の面たひらに計りてぞ植ゆ  
出来過は苗本厚し四角田に埒あい遠く植てよきなり  
やせ田には埒合近く苗つらを植るぞ農のてだてなりける  
根を深く苗腰折りて植えし田は痛める故に育ちがたかり  
水湛へ窪き田ならばいつ逆も老たる苗を大本にせよ  
苗本に大小あれど植えて後田の面の見えはさのみかはらじ  
時來ても田をば一度に植えなまし風雨の變化はかりがたかり  
植る田のはかゆき又は後るゝも小苗配りの手だてにぞよる

第五十四、縹取心得

代かきの馬の縹取心得よ立てよやれよの程を能くして  
すぐに行く時こそやれと聲かけよ馬を廻さば立てよ鼻取り

第五十五、早苗三七日の變化

田を植えし始はいつも苗腰の曲りてぞ見ゆ根付かざるゆえ  
植る時曲りし苗の手直しはなべて七日の内とこそ知れ  
植えしより二週り目に至る頃早苗は赤く色替りけり  
三週りのはつか一日といふ時に苗はまことの色となりけり

第五十六、早苗分離

さなぶりといへるは小苗取分けて田植納のことなるぞかし  
さなぶりにもとより湯をば忌むことぞ手足洗ふに水がよきなり  
さなぶりは早く歸りて先づ祝へ餘所の田植に寄るを忌むなり  
村並の大きさなぶりは五月末夏へ越しては祝はぬものぞ

第五十七、朝草刈初

山里の朝の馬草の刈初は大きなぶりの日よりとぞ聞く

田植えなば何れの里も朝毎に野に出で馬草刈り歸らなん

第五十八、田肥養

あまたある肥しの性の田の土にあふどあはぬをためし見よかし  
いつも肥過てはわるしさればとてたらねば猶も稔あしきぞ  
夏山の青草敷はあらくれをかきけるあとに入れて腐らせ  
植代の深田に草をかきこめば地底賑ひ早苗根付くぞ  
芝原のけづり草をばあらくれを掻かざる前に入れ置くがよし  
田を植る先に敷けかし荏のからは水を淀めて脇へ流さじ

第五十九、里郷鏝草附鋤留

さと郷の田の肥しには芝原の草土などを削り込むなり  
芝原もあらくれ前に鋤留めて漫りに草を削らせぬとぞ  
あらくれの節近づけば日を定め行きて芝原けづりとなるなり

第六十、山郷青刈敷附鎌留

山郷の田の肥しには昔より青刈敷を用ひけるなり  
外山なる麓の里は鎌留て漫りに草を刈らせざりけり  
鎌留の口の明きなば村人はあらくれ時に草を刈るなり

第六十一、坑肥

水屋尻馬屋尻水肥穴へ草土共に入れて腐らせ  
肥坑へけづり入れたるくされ土田にも畑にもきくものぞかし

第六十二、川堀微肥

種子池や汚水流るゝ川ごみは薄田肥やすにいとよしと知れ

第六十三、牛馬野飼



里郷の野飼の馬は芝原にほだしを打ちて放し置くなり  
山郷や里郷ともに牛馬を田植過より野飼するなり  
いかにせんほだし打ちてもともすれば作場へのぞく芝原の駒  
里郷の馬を放すも晝の内夕べになれば牽き歸るなり

第六十四、山々牧馬

牽き寄せて遣はぬ内は牧に馬いく日もはなち野飼するなり  
狼のあれてあだなす野牧には晝のみ馬を放つなりけり  
馬牽きて往來するには戸をとざし牧の内よりとり逃すなよ

第六十五、苗代水

苗代の水はもとより夜深く晝淺くしてよしとこそ知れ  
晝水の淺き苗代日をうけむ夜深くば霜ふせぐらん  
苗代の早苗うごもることあらば晝水干して夜そぐべし  
泥ともに早苗うごもる苗代はたぐえし水の落ちぬ故なり

苗代の田坪かきなばぬるま水深く湛へて置くがよきなり  
苗代の冷る山田のこは水は池にまはして和らげよかし

第六十六、田水

田の水は深き淺きの中を取り絶えず湛えて置くがよきなり  
水上の近き流れは朝冷ゆる山田の水は夕べかくべし  
山川の遠き流れは末ぬるむ里田の稻はとはにかくべし  
霜の氣の見へなば田水常よりも多く湛へて置きたるがよし  
水多く湛へ置きなばよしや霜の降ても稻は痛まざらまし  
六月の照る日の頃は分けてなほ田水はほすなしばしなりとも  
旱年水は湛へすかけながせ水の深くば稻に障らん  
雨年は絶えず流るゝ田の水を打臥せとめて日に當てよかし  
水見には田の坪々をよく廻り尻土の田とても残さぬぞよき  
水見なば草場の近き其田坪留めに廻りて馬草刈れかし  
田水見の歸りに馬草いつも刈れ假初ながら手間の得なり

第六十七、濕田、燥田水

田の底の濕りしならば上水を常より多くかけて置けかし  
常よりも水かさ多く懸けぬるは濕田の冷を押へ置きため  
願はくば濕田の中に堀をあけ底の冷水ぬきて取りたし  
燥き田の水は常より心して多く湛へて置くがよきなり

第六十八、夜水引

油斷して早にはすな田の水を晝隙なくば夜注げかし  
時ありて夜水引くとも人の田の畔を放ちて盗み取りすな

第六十九、耘

田植して三週頃にくさとれよ秀たけ高く茂らざるまへ  
教へにも初草取は苗植て廿一日を法としにけり  
心して田秀とる時苗本の端草除きて稻を育てん

一番子まづ南北へ耘りて後東西とはかを持つべし  
稻草の出来おろかなる田の秀は朝露落て後に取るべし  
朝露を心の儘にふくませて耘ぬれば秀とれてよし

第七十、蝗

苗の葉を結び巢籠る稻虫のふえざる内に取捨てよかし

第七十一、難捕いなむし送

夜間通し苗の根を食ふいなむしは姿かくして捕はれもせず  
莖と葉にひしとつきたるありくひの形は見へて之もとられず  
取る事のならぬ類のいなむしをまつりごととして送れ水無月

第七十二、田埒合稗

みのりきは埒間稗穂を抜きてとれ又來ん年の稻に障れば

第七十三、案山子鳴子

猪猿シノノを威す爲なる案山子して鳴子田の面に鳥寄せぬなり

第七十四、稻 日 數

苗うえてちから蟬鳴く頃になればはやくも早稻はみのりそめけり

苗植ていつしか五十七日を経ぬれば開く早稻の花かも

早稻の花たもつよはひの七日とは問はれずとも人は知りなん

赤稻は植て六十五日目に花咲き十日たもつとぞ知る

苗植て日數六十八日に至れば開く金森の花

金森の咲てたもつは十五日花美はしく盛りてぞ見ゆ

苗植ていつしか五十二日目にはや白早稻の花は咲きけり

白早稻は花咲きそめてそのよはひ八日たもちて散り終りけり

鶴首の苗植付けて待つほどに五十七日目には咲きけり

鶴首の花のよはひは名にも似ず七日たもちて散るぞはかなき

細葉糯植えて六十三日目に花咲十日餘りさかゆる

北國は植て六十九日目に花咲始め八日榮えし

白いねは植て七十三日目に咲きて散る迄十二日經し

第七十五、稻 刈 時

早稻は先きもち其後七月の末より彼岸過に刈れかし

八月の末より九月終りまでいつも晩稻オムツの刈時と知れ

長雨に水かぶりせる川押のごみ稻ならば穂くびのみ刈れ

往き復りならぬ深田の稻刈らば二手打にて八把束ねよ

をくれ刈り早きに勝る晩稻オムツ青米アヲメならで石イシの多かり

何方も深卑泥田の稻ならば水かけ置きて刈るものぞかし

第七十六、刈 稻 立 様

刈り稻を五把づゝ立てて其上の笠には一把かぶせ置けかし

干す爲に晝間はづして笠稻を夜毎に懸けよ雨の用心

第七十七、稻 干

日和見て朝刈りちらす其稻も日のかたむかば穂似字にぞする  
朝干して夕その稻取りあつめ田に積み置くを穂似字とぞいふ  
世のたとへ一夜に七度秋空のかはるといふぞ油断はしすな  
干し稻の夜の間に雨に逢ふならば後の始末に手間は倍せん

第七十八、稻 揚 雑 事

田の面より干しいねあげて似字に積み餘りし稻は家に蔵めよ  
干稻を束ぬるならば把束の結び目なかにこめてゆはせよ  
干しちらす小把の稻を取揃へ大把ゆひしを把束といふ  
幾度か馬荷くりなして運びけん小田には稻の残りなきまで  
稻場にて落穂を拾ひ取るとも下穂は残せ野狐の爲なり

第七十九、稻 似 字 積 所

空地なくばしかたなければと稻似字は居屋を離れよ火事の用心  
稻似字の上にかぶせるくびりわら何方にても母似字といふ

第八十、稻 扱

稻扱がば念入れよかし其わらに残れる穂をばゑりぬきもして  
扱にごみませるな之を猿こぎといふてぞ人の嫌ふ事なる  
猿こぎといふは山田の青いねをましらの半ばこぐことぞかし  
田干しいねこぎなばなかにまじりたるその赤米をとりのぞけかし

第八十一、秋 田 剖(鳥生)

稻刈らば先づひどろむき秋うなひして置くがよし來ん年のため  
秋の日にうなひ置きけん田に冬の水をかけなばこみ溜りなん

第八十二、田 冬 水 附 春 水

冬水を懸けなば深田の土は風化こみも溜りて肥えまさるらん